

阿志岐古墳群

(阿志岐古墳群 B 群第21～25号墳の調査)

筑紫野市文化財調査報告書

第 7 集

1982

筑紫野市教育委員会

阿志岐古墳群

序

筑紫野市は昭和47年市制施行以来、早10年を迎えようとしています。その間人口は2倍近くに増加し5万8千余人となり、日々都市化が進み、多くの都市問題も発生してきています。

又、農業の近代化、協同化も促進されて来ています。

今回の調査は、それら建設事業のための土取事業により、やむなく遺跡を破壊せざるを得ず、国及び県の補助金を受けて遺跡の緊急発掘調査を実施しました。

また、この調査の結果、本市においても数例しか発見されていない極めて古い時期の古墳の一つであることが分かりました。

調査に際しまして、福岡県教育委員会の諸技師、九州歴史資料館の諸学芸員、九州大学医学部第2解剖学教室の諸先生や地元阿志岐、吉木の各位に、ご協力をたまわり感謝にたえません。

なお、本書に収録された資料が永く保存され、市民各位の文化財保護思想の育成に活用されますと共に、学術研究の分野において役立つことも願うものであります。

昭和57年3月31日

筑紫野市教育委員会
教育長 松田 康男

例 言

1. この報告書は、筑紫野市大字阿志岐に所在する阿志岐古墳群B群第21～25号墳の発掘調査報告書である。
2. 発見当初、仮に阿志岐シメノグチ古墳群1号～5号墳としていたが、詳細調査の結果、阿志岐古墳B群に属し、既に20号墳までであるので、1号～5号を21～25号墳に認定する。
3. 調査は筑紫野市教育委員会が昭和56年度国県補助を受けて実施した。
4. 現地における実測は、山野洋一、山村淳彦、奥村俊久がそれぞれ行った。
5. 遺物、遺構の実測、製図は山野、奥村で行った。
6. 写真撮影は山野が行い奥村が協力した。
7. 本書の執筆は、山野がⅠ、Ⅲ1・3・7・8・Ⅳ1を、奥村がⅡ・Ⅲ2・4～6、Ⅳ2・3をそれぞれ担当した。
8. 本書の編集は山野が担当し、奥村が協力した。

本文目次

	頁
I 調査にいたる経過	1
II 位置と環境	2
III 調査の内容	5
1. 調査概要	5
2. B群21号墳の調査	7
3. B群22号墳の調査	17
4. B群23号墳の調査	21
5. B群24号墳の調査	23
6. B群25号墳の調査	27
7. その他の遺構	29
8. 遺跡出土の石器	36
IV ま と め	37
1. 出土土器より見た墳墓の年代観	37
2. 墳丘について	38
3. おわりに	39

図版目次

	本文対照頁
図版 1 —(1) 遺跡の遠景（西から）	2
(2) 遺跡の遠景（北から）	2
図版 2 —(1) 遺跡の全景（東から）	5
(2) 表土除去後の遺跡の全景（南から）	5
図版 3 —(1) 21号墳全景（東から）	7
(2) 21号墳と22号墳（西から）	7
(3) 21号墳墓道	7
(4) 21号墳閉塞状態	7
図版 4 —(1) 21号墳羨道部	7
(2) 21号墳玄室	7
(3) 21号墳玄室内遺物出土状況	8
図版 5 —(1) 22号墳全景（東から）	17
(2) 22号墳と周溝（北から）	17

(3) 22号墳主体部検出状況（南から）	17
図版 6 —(1) 22号墳主体部	17
(2) 22号墳鉄器出土状況	19
(3) 周溝内土器出土状況	19
図版 7 —(1) 23号墳全景（南から）	21
(2) 23号墳 1 号主体部	21
(3) 1 号主体部鉄器出土状態	21
(4) 2 号主体部検出状況	21
図版 8 —(1) 24号墳全景（南から）	23
(2) 主体部検出状況	23
(3) 主体部	23
図版 9 —(1) 24号墳主体部完掘状況	23
(2) 主体部内銅鏡出土状態	23
(3) 24号墳周溝内土器出土状態	23
図版10—(1) 21号墳全景（南から）	27
(2) 1 号主体部（右）と 2 号主体部（左）	27
(3) 木棺墓全景（南から）	29
図版11— 1 号石棺墓（東から）	29
図版12— 2 号石棺墓（東から）	33
図版13—(1) 1 号石棺墓人骨と鉄器	35
(2) 2 号石棺墓人骨	35
図版14— 21号墳出土土器（その 1）	12
図版15— 21号墳出土土器（その 2）	12
図版16— 21号墳出土土器（その 3）	14
図版17—(1) 21号墳出土土器（その 4）	16
(2) 21号墳出土鉄器	11
図版18— 21号墳出土装身具、装飾具	9
図版19—(1) 22号墳出土鉄器	19
(2) 23号墳出土鉄器	21
(3) 1 号石棺墓出土鉄器	33
(4) 22号墳周溝出土土器	19
(5) 24号墳出土土器	23
図版20—(1) 24号墳出土銅鏡	23

(2) 遺跡出土の石器	36
-------------	----

挿 図 目 次

	頁
第1図 阿志岐古墳群周辺古墳時代遺跡位置図	3
第2図 遺跡付近地形図	4
第3図 阿志岐古墳群B群21～25号墳地形測量図	6
第4図 阿志岐古墳群B群21～25号墳墳丘測量図	折り込み
第5図 21号墳墳丘土層断面図	8
第6図 21号墳石室実測図	折り込み
第7図 21号墳出土装身具実測図	10
第8図 21号墳出土装飾具実測図	11
第9図 21号墳出土鉄器実測図	11
第10図 21号墳出土須恵器実測図	13
第11図 21号墳出土須恵器実測図	14
第12図 21号墳出土須恵器実測図	15
第13図 22号墳主体部実測図	18
第14図 22号墳出土鉄器実測図	19
第15図 22号墳出土土師器実測図	20
第16図 22・23号墳墳丘断面図	折り込み
第17図 23号墳主体部出土鉄器実測図	21
第18図 23号墳主体部実測図	22
第19図 24号墳周溝土器出土状態実測図	23
第20図 24号墳主体部実測図	24
第21図 24号墳出土鏡片実測図	25
第22図 24号墳出土土師器実測図	26
第23図 24・25号墳墳丘断面図	折り込み
第24図 25号墳主体部実測図	28
第25図 22号墳・木棺墓・石棺墓旧地形測量図	30
第26図 木棺墓実測図	31
第27図 1号石棺墓実測図	32
第28図 1号石棺墓出土刀子実測図	33
第29図 2号石棺墓実測図	34

第30図	1号石棺墓人骨出土状態実測図	35
第31図	遺跡出土石器実測図	36
第32図	22～25号墳東西地山整形状態	38

表 目 次

		頁
第1表	21号墳出土玉類計測表	10
第2表	21号墳出土土器観察表	16

I 調査にいたる経過

今回、発掘調査を実施した周辺には宮地岳より派生した丘陵に数十基を単位とする古墳群があり、しばしば採土により遺跡が破壊されることがあった。本遺跡は昭和55年12月県文化課より当該地が伐採されていることが知らされ、市教育委員会担当者が現地を確認し、墳丘中央が陥没した円墳1基と低墳丘を4基確認し、直ちに土地所有者に山林伐採の目的と今後の利用計画について尋ねた。この結果当分の間、杉・桧の植林が目的であったので、古墳の保護のみをお願いし、今後古墳の現状変更を行う場合は市教育委員会と協議することになっていた。

しかし、昭和56年4月、一市民より当該地において採土作業が開始されている主旨の通報があり、市教委担当者が再度現地を訪れ、採土業者に古墳の所在を明らかにし、現地において古墳の保護・保存について協議を行ったが、採土計画もせまっており、又すでに土地所有者とは採土の契約も済ませていて、現地における古墳の保存は可能性の薄いものとなり、県・市教育委員会、採土業者と再三の協議を行い、昭和56年度国庫補助事業として、筑紫野市教育委員会が調査主体者となり、昭和56年5月13日～同年8月28日まで現地調査を実施した。その間も採土は続行され梅雨期を向え土砂くずれの危険と背中合せの調査であった。

また、遺物整理については昭和56年11月9日～同年12月26日まで実施した。

調査組織及び協力者

この調査期間中の関係者及び協力者(団体等)は次のとおりである。

総括(調査責任者)	筑紫野市教育委員会	教 育 長	松田 康男
庶務	筑紫野市教育委員会	社会教育課長	松浦 敏春
	同	社会教育係長	豊福 茂美
	同	社会教育係主事	山野 洋一
発掘調査	同	社会教育係主事	山野 洋一
	同	同	山村 淳彦
	同	同	奥村 俊久

また、発掘調査において県教育委員会文化課・県立九州歴史資料館・春日市教育委員会・九州大学医学部第2解剖学教室の方々の他に、地元、吉木・阿志岐在住各位の協力を得た。

遺物の整理・復原・保存については、県立九州歴史資料館。人骨の取り上げ鑑定については九州大学医学部第2解剖学教室の諸先生方に特にお手をわずらわせた。

また、この調査期間中、筑紫野市立歴史民俗資料館において作業を行い、多大のめいわくをおかけした。ここに列記して感謝する次第です。

Ⅱ 位置と環境 (第1・2図)

本遺跡は、福岡県筑紫野市大字阿志岐に所在する。

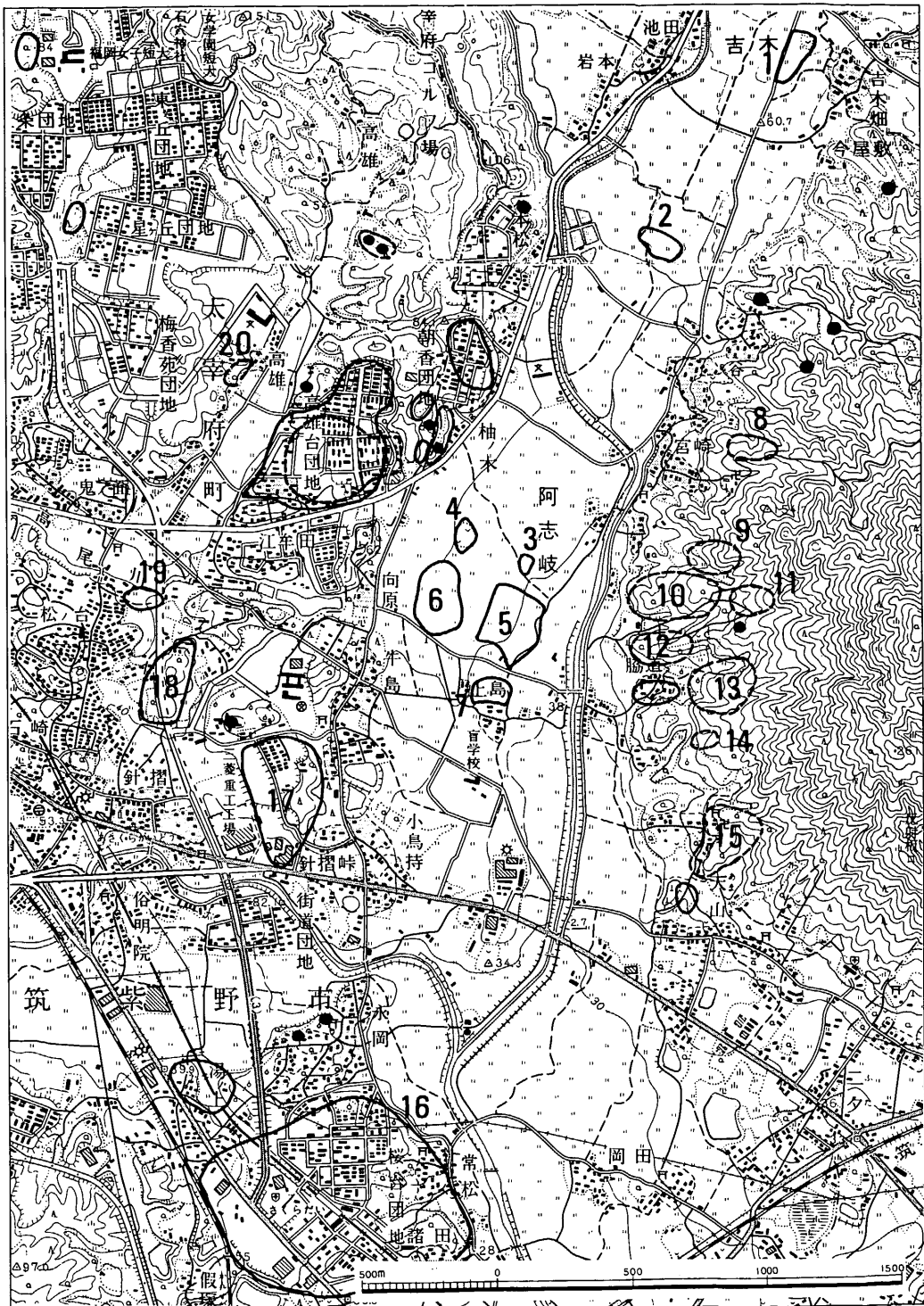
市の東部には筑後川の支流である宝満川が流れる。宝満川は三郡山に源を発し、その東麓を回り込むようにして山間をぬけた後、両岸に肥沃な沖積地を形成する。この中流東側にある宮地岳（標高 339 m）には、現在80基程度の古墳が確認されているが、実数はその数倍にのぼるものと思われる。これらの古墳は群集し、いくつかの古墳群を形成している。

阿志岐古墳群は宮地岳西麓のほぼ中ほどに築かれ、現在までに53基を確認している。古墳群は尾根ごとに南からA群、B群、D群、さらにB群の東側山麓にあるC群の4グループに分けられる。今回調査の対象となったB群21～25号墳は尾根の先端に位置し、やせ尾根上に22～25号墳のいわゆる低墳丘墳が直線上にならぶ。また21号墳は尾根線をややはずれ、22号墳の南側斜面に築造されている。宮地岳西麓には北から杉の谷古墳群、阿志岐古墳群、脇道古墳群、老松神社古墳群、天山古墳群があるが、これまで杉の谷古墳群1～3号墳（註1）と阿志岐古墳群A群3号墳（註2）が発掘調査され、前者は横穴式石室、後者は堅穴系横口式石室をもつことが明らかとなっている。A群3号墳は丘陵先端部にあり、今回調査した古墳と谷を狭んで、ちょうど南隣に位置していた。

筑紫野市は福岡平野と筑紫平野の接点に位置し、平野部は東の三郡山塊、西の背振山塊から派出した山稜によって最も狭い部分となっており、そのため古代から交通の要所であった。宝満川を狭んで宮地岳対岸には高雄山より派出した丘陵が連なり、この丘陵上には7基の内部主体をもち方格矩鏡などを出土した菖蒲浦1号墳や、方形・円形周溝墓からなる峠山遺跡が所在する。さらに狭長な平野を狭み、市の西側の背振山東端の山稜から延びる丘陵先端には、三角縁神獣鏡を出土した前方後円墳である原口古墳が、さらに北に古墳発生期に属するとみられる古剣塚1～3号墳があり、これに隣接してほぼ同時期の唐人塚遺跡の墳墓群がその北西1kmあまりで宮ノ本遺跡がある。以上のように筑紫野市周辺には古墳時代前期の墓が集中する。本遺跡から山際ぞいに甘木・朝倉方面に下れば、約7kmほどで八並遺跡、さらに13kmほどで持丸古墳群、池の上遺跡、鬼の枕古墳、15kmほどで柿原野田遺跡に達する。夜須町・小都市にわたってそびえる城山北麓に位置する国指定史跡焼ノ峠前方後方墳までは、南東方向に直線距離で8kmを測る。背振山塊の山ぞいに那珂川町へはいると12.3kmほどで炭焼古墳群、油田古墳群、恵子若山遺跡、野口遺跡、老司古墳に至る。

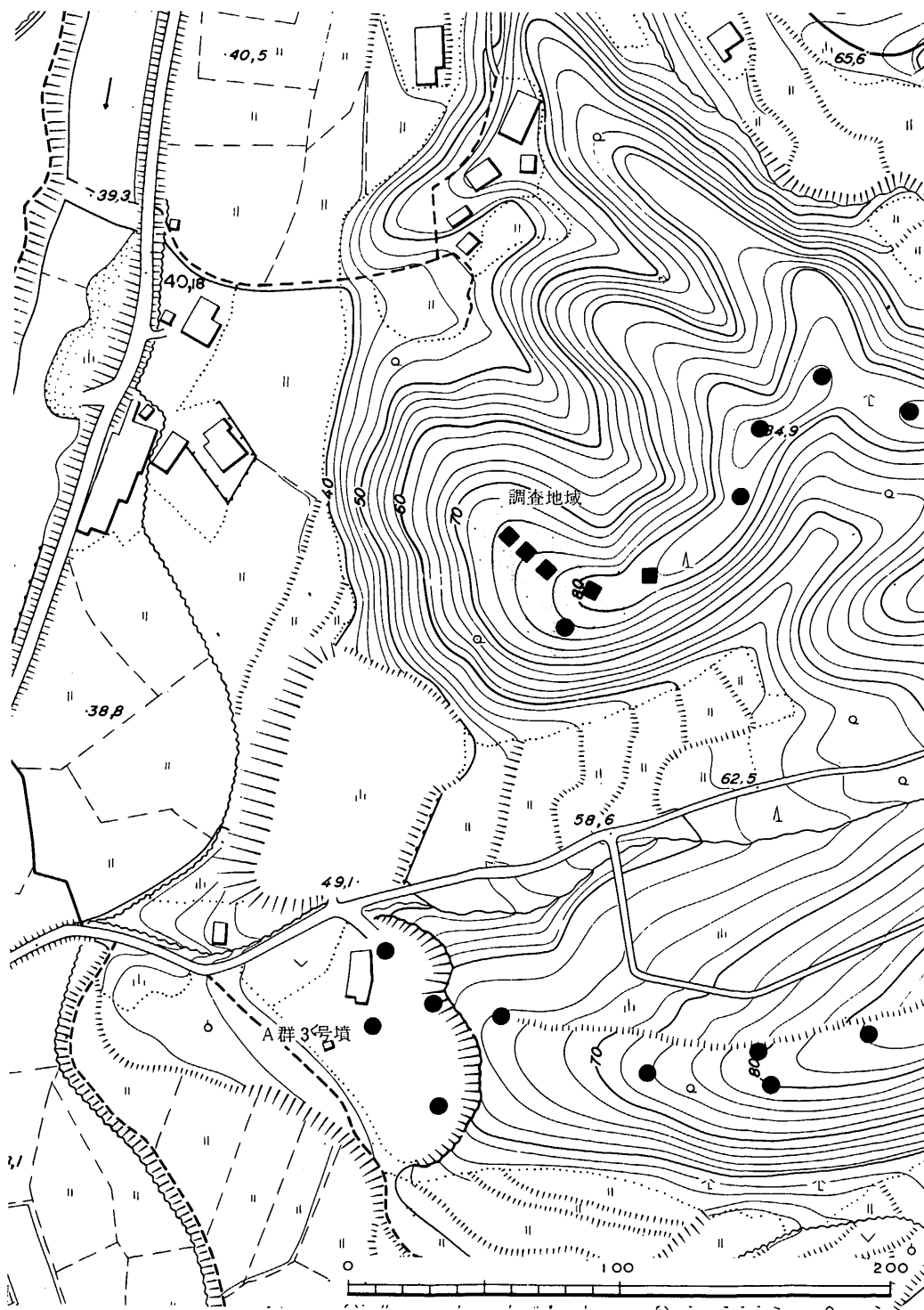
註1 阿志岐シメノグチ遺跡、筑紫野市文化財調査報告書第1集 1972 筑紫野市教育委員会

註2 杉の谷古墳群・カケ塚古墳埋蔵文化財調査報告書 筑紫野市文化財調査報告書第2・3集 1979 筑紫野市教育委員会



第1図 阿志岐古墳群周辺古墳時代遺跡位置図 (縮尺 1/25,000)

- ①御笠地区遺跡A地点 ②御笠地区遺跡B地点 ③御笠地区遺跡D地点 ④御笠地区遺跡C地点
 ⑤御笠地区遺跡F地点 ⑥御笠地区遺跡E地点 ⑦御笠地区遺跡G地点 ⑧杉の谷古墳群
 ⑨阿志岐古墳群D群 ⑩阿志岐古墳群B群 ⑪阿志岐古墳群C群 ⑫阿志岐古墳群A群 ⑬脇道古墳群
 ⑭老松神社古墳群 ⑮天山古墳群 ⑯常松遺跡 ⑰峠山遺跡 ⑱野黒坂遺跡 ⑲大曲遺跡
 ⑳菰蒲浦古墳群 他は古墳及び古墳時代の遺跡を示す。



第2図 遺跡付近地形図 (縮尺 1/2,500)

Ⅲ 調査の内容

1. 調査概要(第2・3・4図)

調査地区は宮地岳西麓より派生した、やせ尾根の最先端部に在り、そこは、本市でも有数の古墳群である阿志岐古墳群のB群に属し、眼下に肥沃な御笠平野を望み、現在の水田面より約40mの比高があり、遺跡は標高70～80mの高所の尾根線上に、ほぼ一列にならんで墳墓が成形されている。(第2図)

調査は当所より土取事業が尾根裾部周辺より進行していたため、墳墓の調査も、それに合せ行い、まず全体の地形測量(第3図)を行った後に、墳頂部が陥没し表面に石材が露呈して21号墳の調査を、まず先に実施した。つづいて、尾根線上の低位にある25号墳24・23・22号墳と順次高所に上がり、最後に22号墳及び周辺遺構の再確認を行った。

この調査により、横穴式石室をもつ円墳1基、周囲に溝をめぐるし、低い墳丘をもち主体部を割竹式木棺とする墳墓4基と石棺墓2基、木棺墓1基を検出した。(第4図)

21号墳は尾根筋よりやや南に下がる斜面に構築された、単室両袖型横穴石室を内部主体とする直径15m程の円墳であり、すでに盗掘を受けていた。墳丘全体の詳細な調査は土取が進み危険な状態であったのでできなかった。

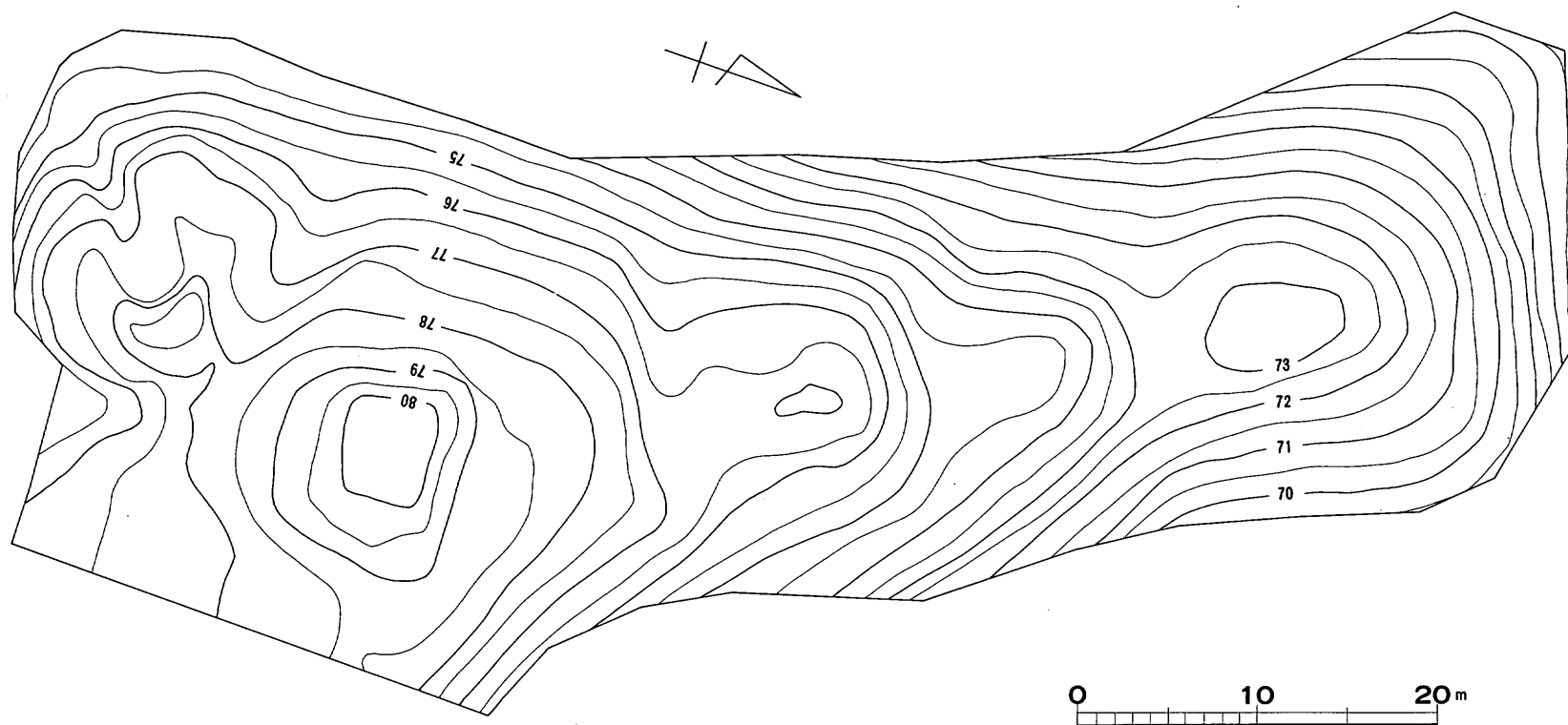
22～25号墳は、尾根線上の東西15～20m、南北75m程の限られた範囲に互いに区画を示しながら、上位から下位へと墳墓が構築されて、その区画は22～24号墳においては2～3方を幅1～1.5m、深さ20～40cmの周溝によって行っている。また、25号墳については判然としなかった。

また各墳の切合いは、21号墳と22号墳とは溝の切り合いにより明確であるが、22号墳と23号墳は切り合いが認められず、23～25号墳では南北の溝を共有するような状態のため明瞭でない。

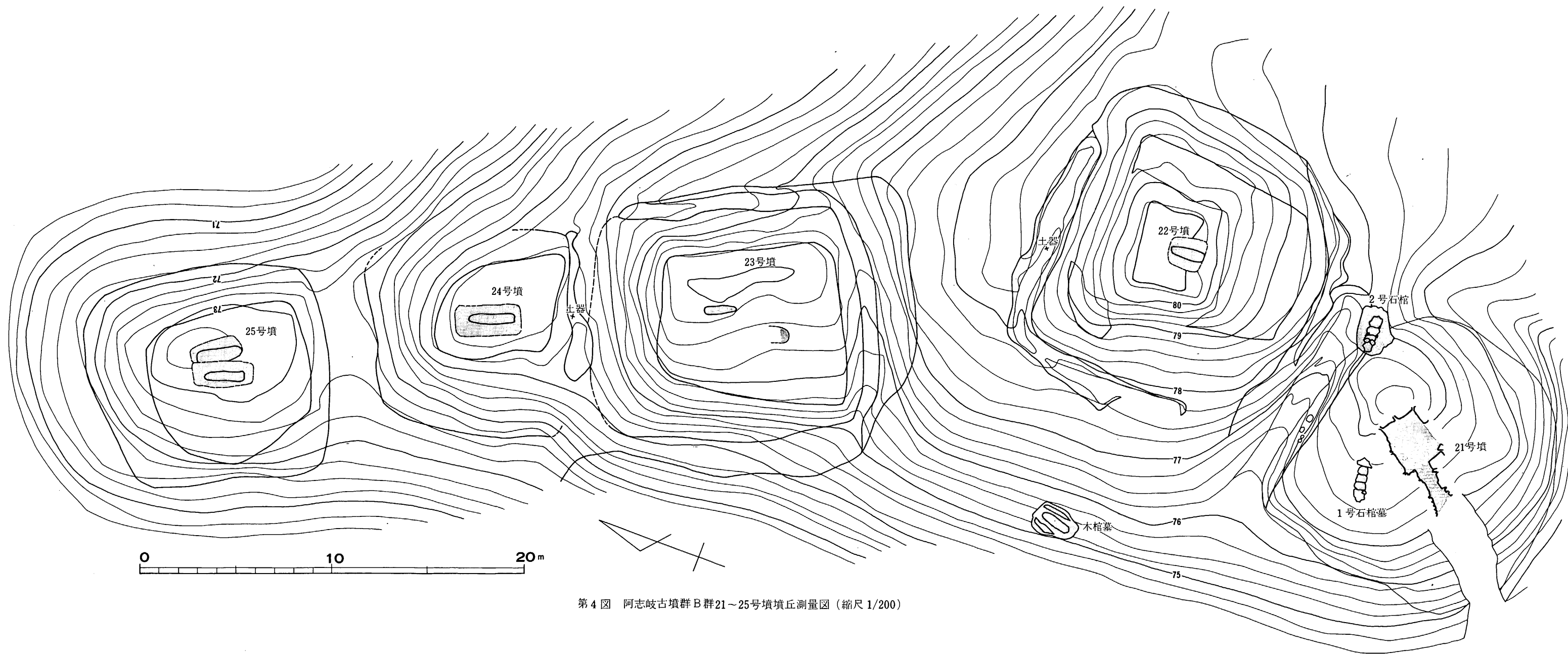
22～25号墳よりの出土遺物は22号墳主体部脇よりの鉄器と北側周溝内より土師器の広口壺があり22号墳の時期決定に欠くことの出来ない資料である。23号墳においては2基の主体部があり1号主体部より刀子が1口出土した。24号墳は主体部の残存はよく内部より孔を穿った銅境片が出土した。25号墳は2基の主体部があり、最初の主体部を削平して新たに主体部を造営している例であるが、遺物としては何ら検出されなかった。

木棺墓、石棺(箱式)墓は木棺墓が22号墳の南裾部6mの所にあり、また、石棺墓は21号墳墳丘下より発見された。石棺墓より各々1体の人骨と1号石棺墓は刀子を副葬していた。

以上が、今回調査した概要であるが、特に22～25号墳の尾根線上には同種のもので、一まわり大きいものが現地に残っており、本遺跡の墳墓群の礎となるものと考えている。



第3図 阿志岐古墳群B群21～25号墳地形測量図（縮尺 1/400）



第4図 阿志岐古墳群B群21～25号墳墳丘測量図（縮尺 1/200）

2. B群21号墳の調査

墳丘(第4・5図 図版3(1))

尾根筋より少し南側斜面に寄って構築された直径15mほどの円墳である。

盛土に先行して墳丘範囲設定のため地山整形が行なわれている。北側を除く裾部には段落が設められ、尾根筋に近い北側では1m程度溝状に掘り窪めており、一部に20～40cm大の礫が裾えられていた。墳丘は調査前から大きく陥没しており、かなり大がかりに石材がぬかれ、墳丘東側は大きく破壊されている。さらに流失なども伴い、盛土は墳丘北側と西側に若干残る程度であった。盛土は石室の裏込めを行ないながら全体的に盛っていたと考えられ、裏込めは比較的に急に叩きしめられているが、裾にかけてはやや大まかな盛土となっている。北側に掘られた地山整形時の溝は墳丘形成時に埋められ、30cm程度外側にずれて再度幅2m程度の溝が設置されている。

石室(第6図 図版3(2)～4(2))

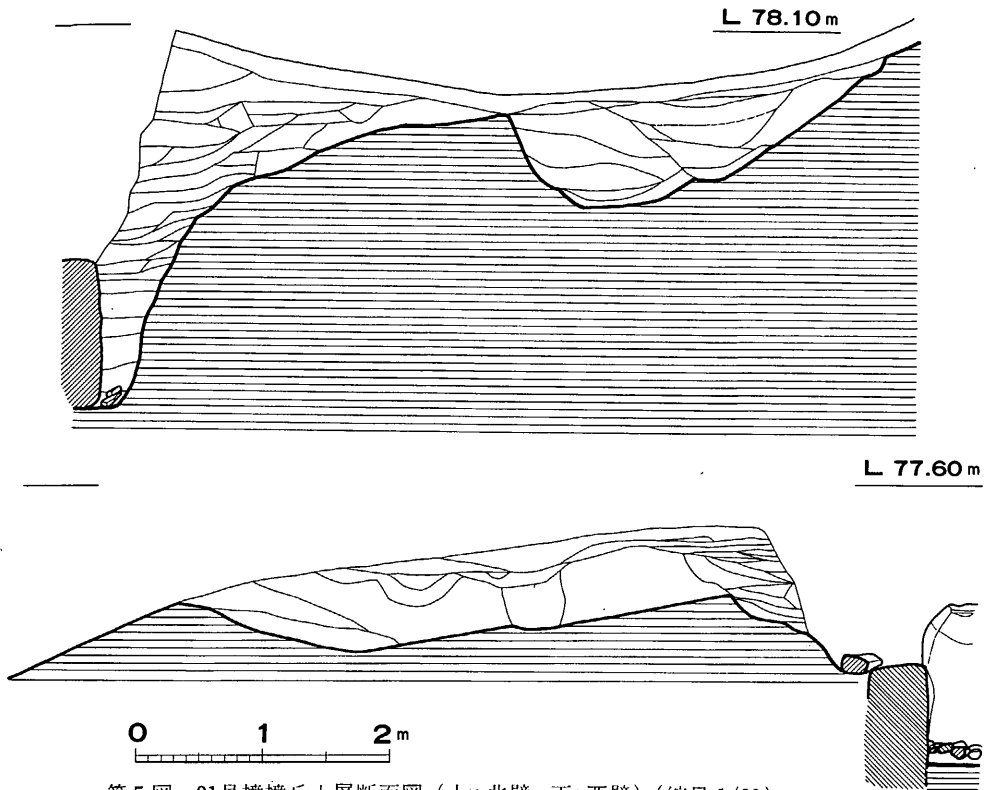
内部主体は主軸をN-40°-Eにとり、南西方向に開口する全長5.2mの単室両袖型横穴式石室である。石室はすでに天井部、および壁体のかなりの部分が失われている。石材はすべて花崗岩が用いられていた。

玄室は奥幅1.95m、前幅2.15m、右壁長2.7m、左壁長2.8mで、やや奥壁側がせばまる方形プランを呈す。奥壁は130cm×120cmと115cm×80cmの石材を立てて腰石としている。左壁は80cm×180cm程度のほぼ同じ大きさの石材を2石横長に裾え腰石としている。右壁は90×110cmの腰石が1石残るが、石材のぬき跡から、あと2石の腰石があったことが推測される。さらに玄門部側にはやや小ぶりの石材が1石補充されている。玄門部は右袖にやや大ぶりの石材が用いられ、羨道が左袖によってとりつけられている。袖幅は右袖が95cm、左袖が45cmを測り、いずれも床面からの高さ1m程度の方柱状の石材を用いている。床面には壁際などに敷石がみられるが、本来は全面に敷かれていたものと思われる。羨道部は長さ252cmを測り、羨道部腰石は左右壁とも100cm×70cm程度の石材を横長に裾え、その上に小ぶりの石材を横積みする。入口には小ぶりの石材を扇状に積み、やや外側へ開く。羨道部床面は比較的に残りがよく、奥壁から270cmと335cmの所に梱石を配す。前者は幅広の石材が用いられ、75cmの玄門幅いっぱいには裾えられている。後者は柱状の石材を横長に裾えたものである。羨道部の敷石は玄室に比べやや大ぶりの石材が用いられている。

閉塞部は入口いっぱいに入る石材をおき、その上に小ぶりの石材をつみ上げている。閉塞下にはⅢ層の土層を観察することができた。また墓道には追葬時(2度目と推定される)に閉塞等からかき出された石材等が残されている。

墓道はゆるやかに西にカーブしながら下っているが、6m以上はすでに破壊され、確認し

った。



第5図 21号墳墳丘土層断面図（上；北壁，下；西壁）（縮尺 1/60）

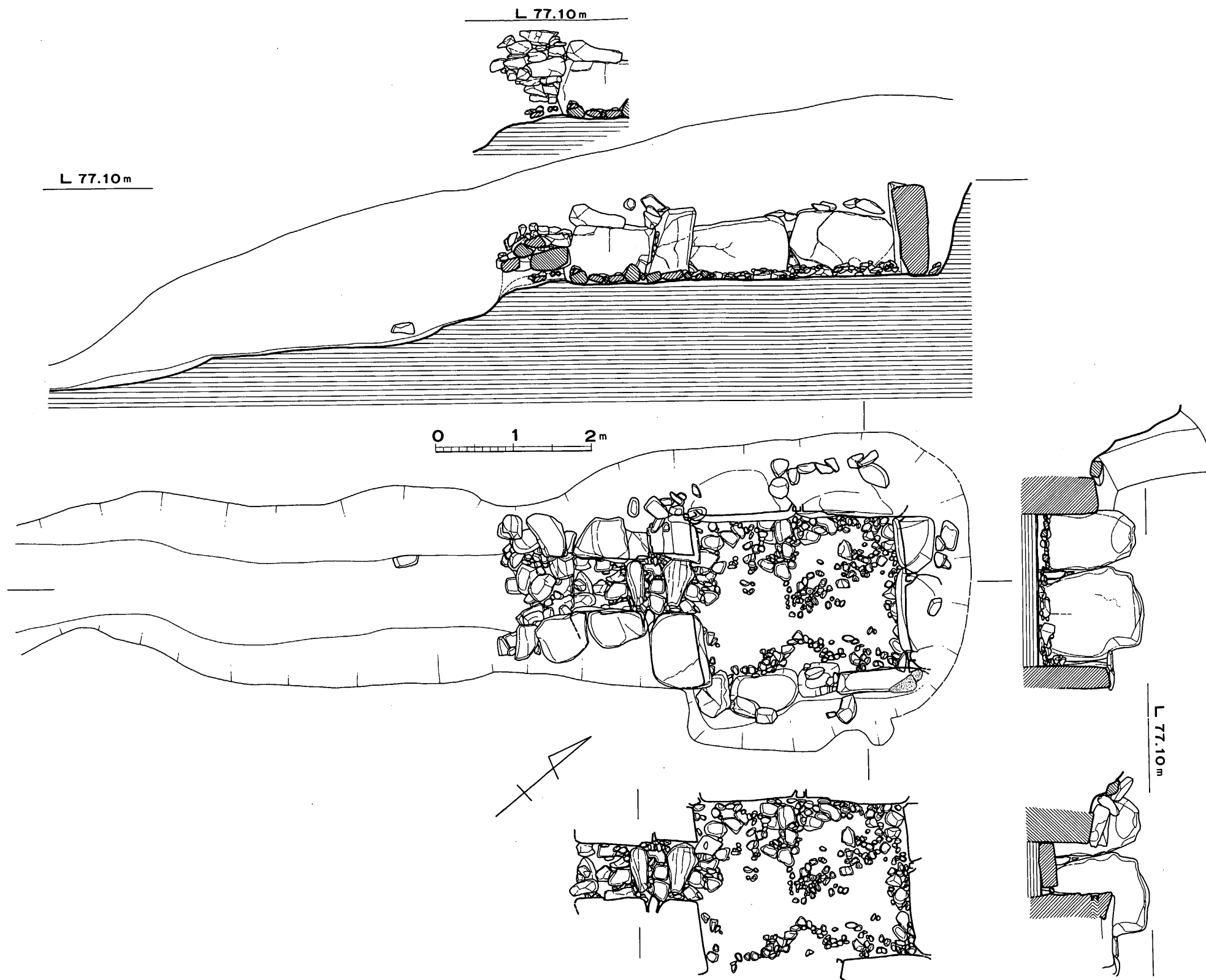
遺物（第6～12図 図版4(3)、14～18）

出土状況（図版4(3)）

遺物の出土場所は玄室・羨道部・墓道の3カ所に分けることができる。玄室はすでに荒らされており、遺物は玄室の左半分を中心に装身具・鉄鏃などが散乱していた。羨道部は梱石間に比較的良好な状態で残っていた。左袖石には提瓶が立て掛けた状態で出土し、右袖石際には刀子が出土した。梱石間には主軸に直交して直刀の破片が、梱石と閉塞部の間からは馬具が出土した。墓道からは須恵器が中心で、最も床に近い所から有蓋高杯が、暗茶褐色土層を狭みその上から甕が出土した。また墓道右側の墳丘上からは駿が3個体出土している。

出土遺物

(1) 装身具	金環	3個
	銀環	4個
	勾玉	2個
	切子玉	1個



第6図 21号墳石室実測図 (縮尺 1/60)

	丸	玉	9個
	小	玉	7個
(2)	装飾具	柄頭	1個
(3)	武器	直刀	1振
	鉄	鏃	5本以上
(4)	馬具	引手金具	2個体
(5)	工具	刀子	1口
(6)	不明鉄器	長方形金具	1点
(7)	須恵器	坏蓋	7個体以上
		坏身	10個体以上
		有蓋高坏	3個体
		無蓋高坏	1個体
		壺蓋	2個体
		埴	5個体
		罎	5個体
		提瓶	1個体
		横瓶	1個体
		甕	2個体
(8)	土師器	皿	1個体
(9)	銭	宋銭	1枚

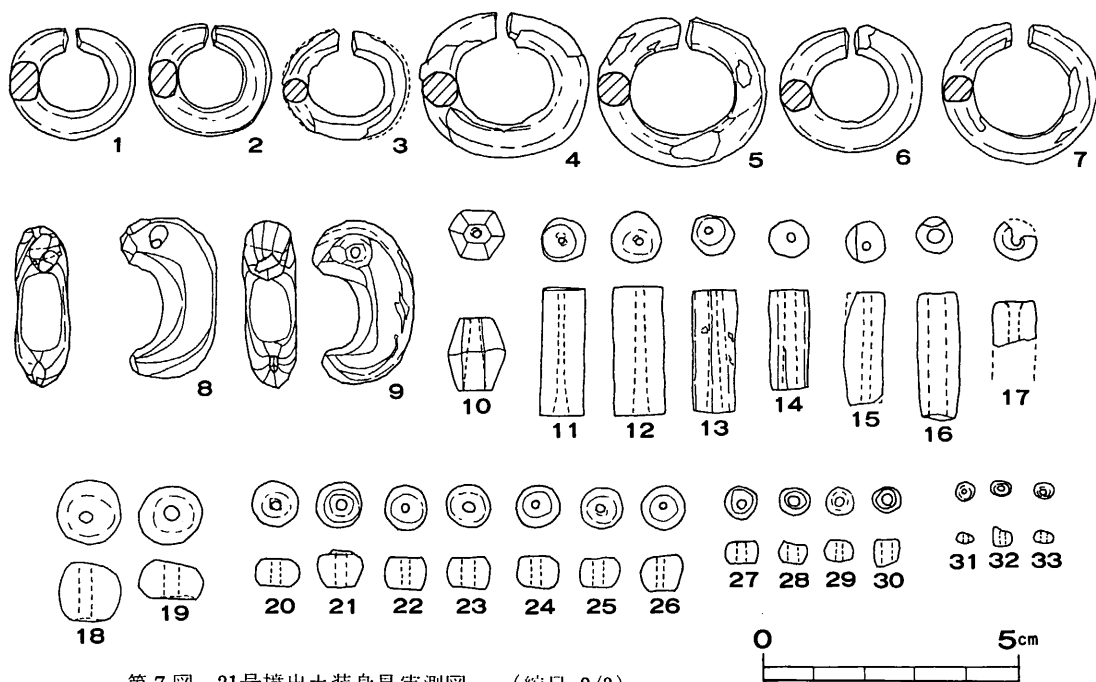
金環(第7図1～3、図版18) 中実の銅胎に金箔をおいたものである。1と2は対をなし、外径2.2～2.4cm、内径1.2～1.3cmを測る。緑青がやや出ているが全体に残りはよい。3は外径2.1～2.3cm、内径1.2～1.5cmを測り、1・2に比べやや細い。金箔は内縁に残る程度である。

銀環(第7図4～7、図版18) 中実の銅胎に板状の銀をおいたものである。4と5は対をなし、外径3.3～2.8cm、内径2.0～1.7cmを測る。4は半分以上銀が剥落し、緑青が比較的多く吹いている。5もやや銀の剥落がみられるが、残りはよい方である。6は外径2.5～2.7cm、内径1.3～1.5cmを測る。銀の剥落もほとんどなく、残りもよい。7は外径2.7～2.85cm、内径1.7～1.8cmを測る。銀の大半は剥落するが、緑青は少ない。

勾玉(第7図8・9表1 図版18) いずれもメノウ製である。8は一方向からの穿孔であるが、9は一方を大きくえぐり、その反対側から孔を開ける。

切子玉(第8図10表1 図版18) 水晶製であるが風化が進み、使用による細かい欠損が多い。一方からの穿孔で、全体に鋭さを欠く。

管玉(第8図11～17表1 図版18) 11～15は碧玉製であるが、15は風化が著しい。13・14



第7図 21号墳出土装身具実測図 (縮尺 2/3)

表一 1 21号墳出土玉類計測表

(単位: mm)

No.	種類	長さ	直径	短径	長さ	孔径	色調	材質	備考
8	勾玉	—	—	—	31	1.5~2.4	淡茶色	メノウ	片側穿孔
9	〃	—	—	—	35	1 ~ 3.5	〃	〃	〃
10	切り玉	11	6	14.5	1 ~ 3.5	(透明)	ガラス	〃	〃
11	管玉	9	8.5	25	1 ~ 3	深緑色	ヒスイ	〃	片側より2回穿孔
12	〃	10	9	25	1 ~ 3	〃	〃	〃	片側穿孔
13	〃	9	8.5	24.2	1.2~3.5	〃	メノウ	〃	片側穿孔 表面に稜を残す
14	〃	8	7	19.5	1.5~3	〃	ヒスイ	〃	〃
15	〃	8	7.5	22	1.2~2	白緑色	—	〃	片側穿孔 風化ひどし
16	〃	7	6.5	25	3.5	淡青色	ガラス	〃	一部欠失
17	〃	8.5	—	9 + α	2.5~3.5	明青色	〃	〃	欠失部多し
18	丸玉	13	12.5	12	2.5	濃青色	〃	〃	〃
19	〃	13	12.5	7.5	2.5~3	深青色	〃	〃	〃
20	〃	9.2	9	5	2 ~ 3	濃青色	〃	〃	〃
21	〃	9.2	9	8.5	2 ~ 2.5	深青色	〃	〃	〃
22	〃	9	8.2	7	1.5	濃青色	〃	〃	〃
23	〃	9	8.1	6	3	〃	〃	〃	孔の断面はだ円形
24	〃	9	8.5	6	2	〃	〃	〃	〃
25	〃	8.5	8	6	2	〃	〃	〃	〃
26	〃	8	7.5	7	1.5~2	〃	〃	〃	〃
27	小玉	6.5	6	4.5	2	〃	〃	〃	〃
28	〃	6	5.5	4	2	〃	〃	〃	〃
29	〃	5.5	5	4	1.5	明青色	〃	〃	〃
30	〃	5.2	5	5	2	濃青色	〃	〃	〃
31	〃	4	3.5	2	1	淡青色	〃	〃	〃
32	〃	4	3	4	1.5	明黄色	〃	〃	〃
33	〃	4	3.5	3	1.5	淡青色	〃	〃	〃

は研磨が十分でなく、14は比較的是っきりとした稜を残す。15は半分程度欠失する。16・17はガラス製で、気泡が多く認められる。17は2/3程度が欠失するが、16はやや中膨らみとな

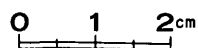
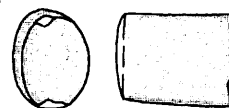
っている。

丸玉・小玉(第8図18~33 表1 図版18) いずれもガラス製である。これらは径によって18・19(長径13mm)、20~26(9.2~8mm)、27~30(6.5~5.2mm)、31~33(4mm)に4分することができ、さらに長さによって18(12mm)、19~26(8.5~7mm)、27~33(4.5~2mm)に3分することができる。この分類に基づき、18~26を丸玉、27~33を小玉とした。

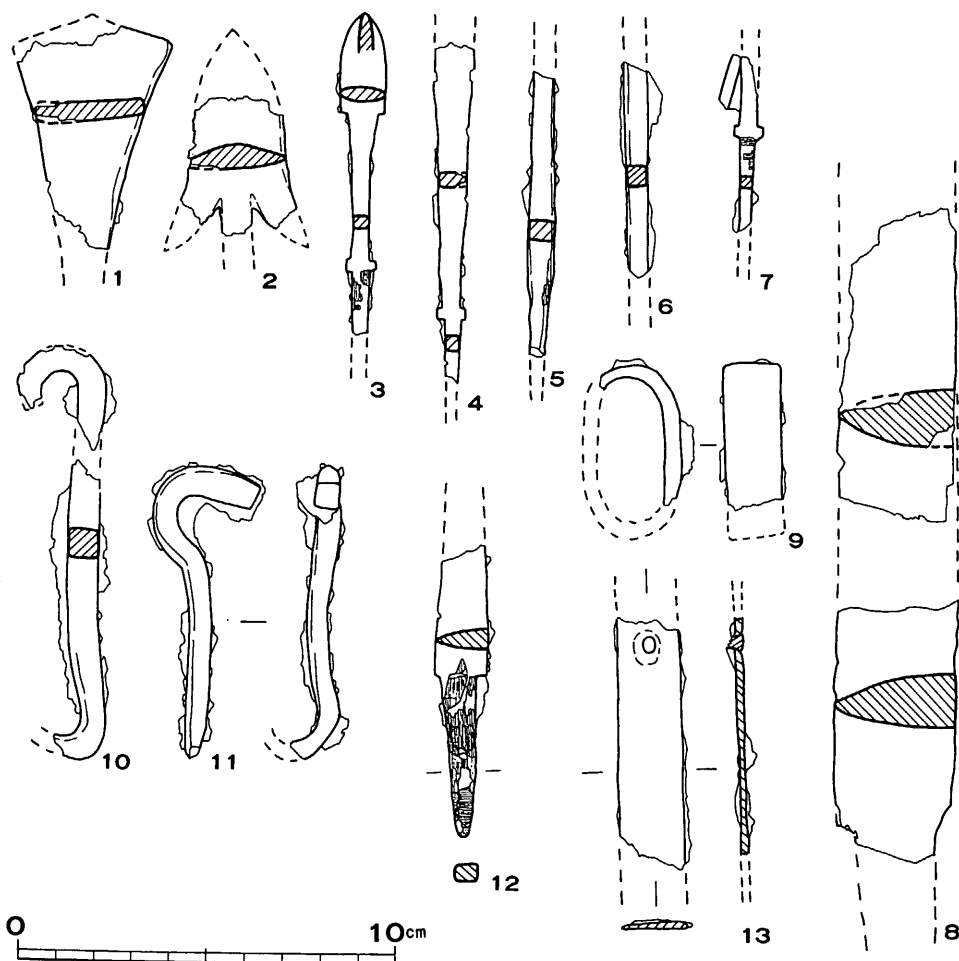
柄頭(第8図 図版18) 長さ14mm、断面は長径11mm、短径8.5mmの隋円形を呈し、銅胎に金箔をおくものである。端部には腐食による破損が2カ所に認められる。

緑青は比較的多く吹いているが、体部の金の残りは良好である。

直刀(第9図8 図版7(2)) 身部の破片で、錆とひびわれが著しい。断面は身幅3.2cm、棟幅1.4cmを計る。



第8図 (実大)
21号墳出土装飾具実測図



第9図 21号墳出土鉄器実測図 (縮尺 1/2)

縁金具(第9図9 図版7(2)) 半分程度欠し、錆も著しい。幅15mm、断面は長径46mm、短径26mmと推定される。

鉄鏃(第9図1～7 図版7(2)) 1は圭頭広根斧箭式、2は両丸造腸揚柳葉式、3は両丸造棘筥被鑿箭式、4・5・7は棘筥被式である。

馬具(第9図10・11 図版7(2)) いずれも引手金具である。11の両端環部のとりつけは90°の角度差をもつ。

刀子(第9図12 図版7(2)) 身部の中ほどから先を欠失する。茎部は長さ43mmを計り、木質が残る。身部は関に近い部分で身幅14mm、棟幅5.5mmを計る。

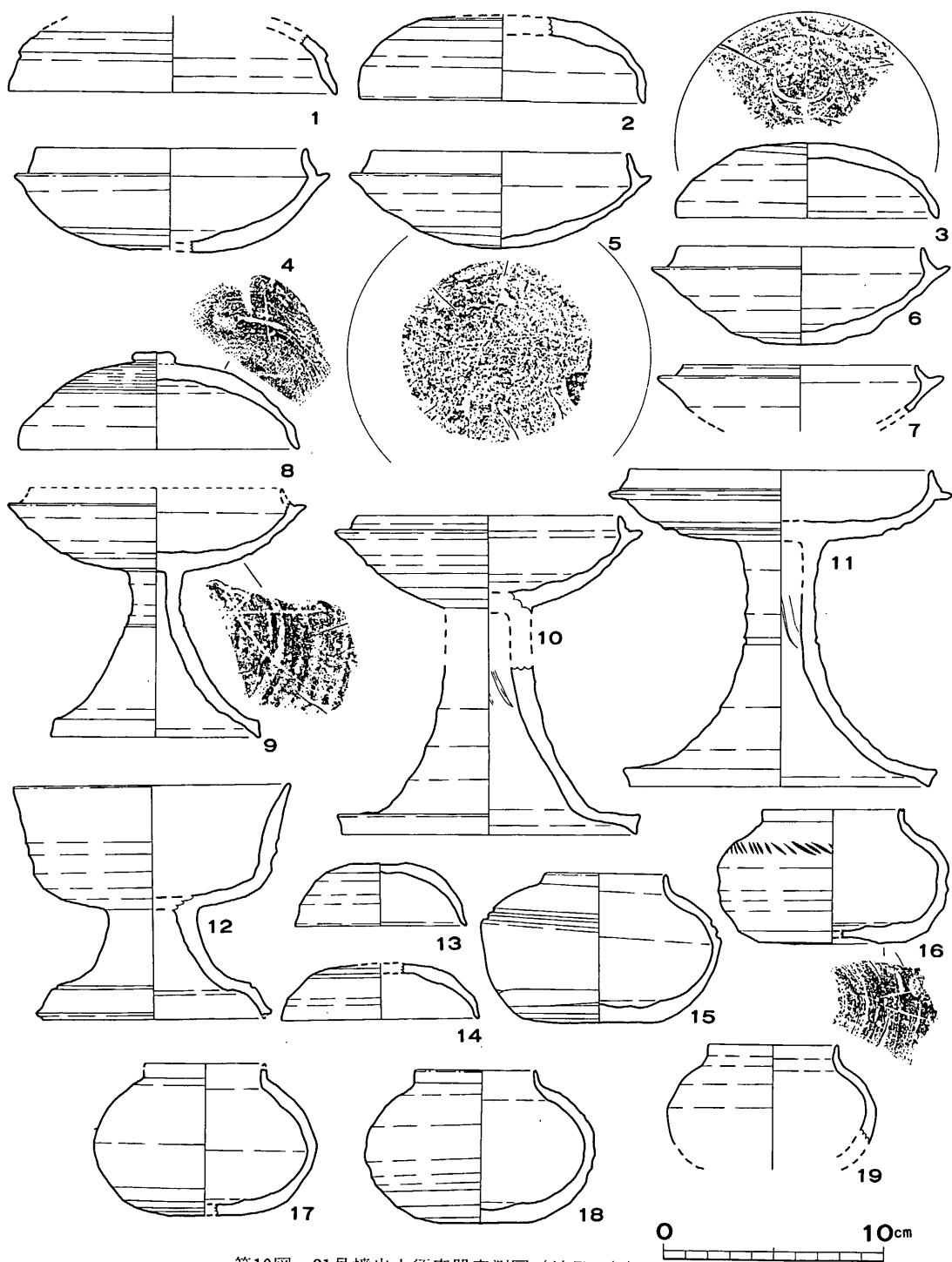
長方形金具(第9図13 図版7(2)) 幅17mmを計るが、上下を欠失する。残存部の一端には鋸が打ち込まれ、裏面には木質を残す。

須恵器(第10・11・12図 図版14・15・16・17(2))

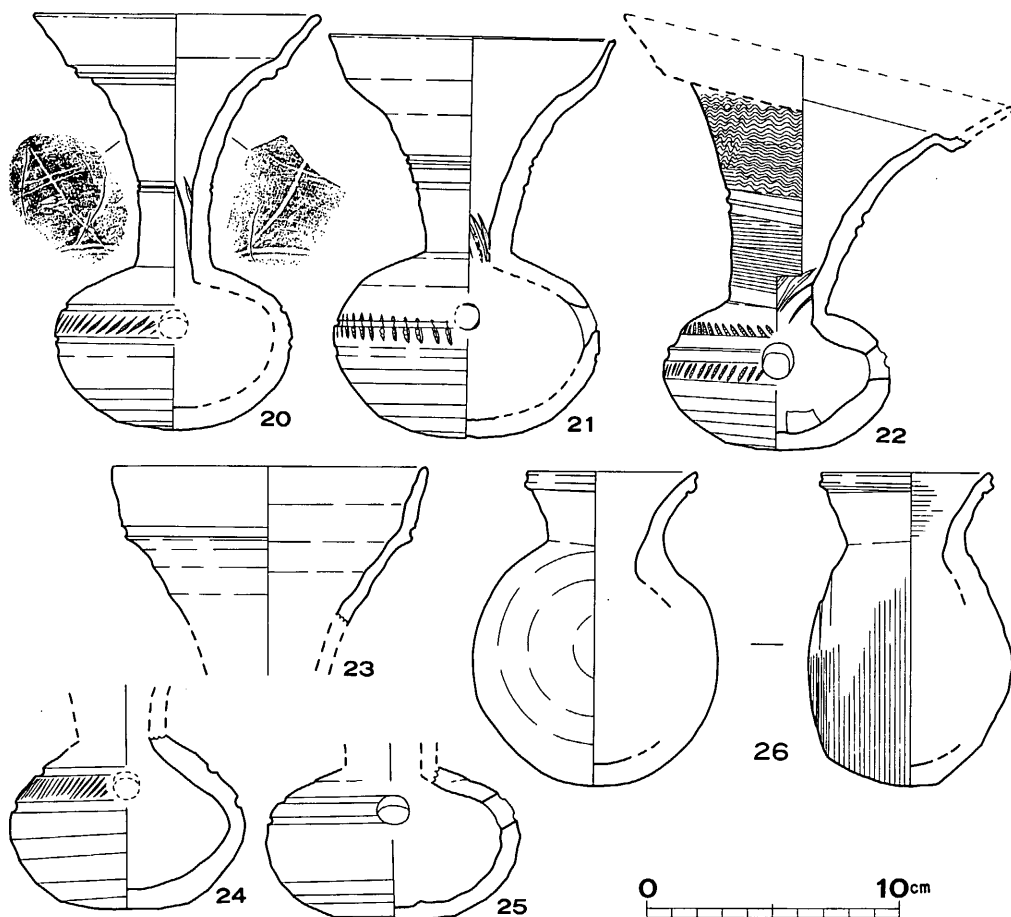
坏蓋 1の天井部と体部の境は、沈線状の段で分けられ、体部は外傾し、口縁部は開き気味に立つ。口唇部は尖り気味におさまリ、口縁部内面は内傾する。2は天井部から体部までゆるやかなカーブをもって下り、直立する口縁部に至る。口唇部は尖り気味におさまリ、口縁部内面は内傾する。3は天井部から口縁部までゆるやかなカーブをもって下り、口唇部は丸くおさまる。

坏身 4は立ち上り高1.2cmを計る。立ち上りは内傾し、中ほどから上方に引き起こされる。受け部は浅い凹状をなし、端部はやや上方に引き出される。体部から底部にかけてゆるやかなカーブをもって下る。5は立ち上り高1.1cmを計る。立ち上りはやや内傾し、受け部はやや上方に引き出される。体部は浅いカーブを描き、丸みの強い底部へ至る。6は立ち上り高1cmを計る。立ち上りは内傾し、中ほどから上方に引き起こされる。受け部はやや上方に薄く引き出され、体部から底部にかけては粗い胎土と荒い整形により、ややいびつな形態を呈す。7は立ち上り高0.6cmを計る。立ち上りは強く内傾し、端部に僅かな段をもつ。受け部はやや上方に引き出され、体部は直線的、または浅いカーブをもって下るものと思われる。

有蓋高坏 8は高坏蓋である。天井部は回転ヘラ削りの後、カキ目調整が施され、中央に撮がつく。天井部から体部までゆるやかなカーブをもって下り、口縁部はやや外傾して立つ。9は色調・胎土・焼成より8とセットをなすものと考えられる。立ち上りは欠失する。受け部は水平、またはやや上方に引き出され、体部から底部にかけてゆるやかなカーブを描いて至る。脚は高くなく、筒部の中ほどのやや高い部位に一条の沈線がめぐる。10は坏部、脚部ともに1/4程度の残りであり、胎土・焼成・色調より同一個体と考えられる。立ち上り高0.7cmを計る。受け部は浅い凹状をなし、やや上方に引き出される。脚は大きく開き、筒部上部にシボリ痕が認められる。11は立ち上り高0.9cmを計り、受け部は僅かに段状を呈し、端部



第10図 21号墳出土須恵器実測図（縮尺 1/3）



第11図 21号墳出土須恵器実測図（縮尺 1/3）

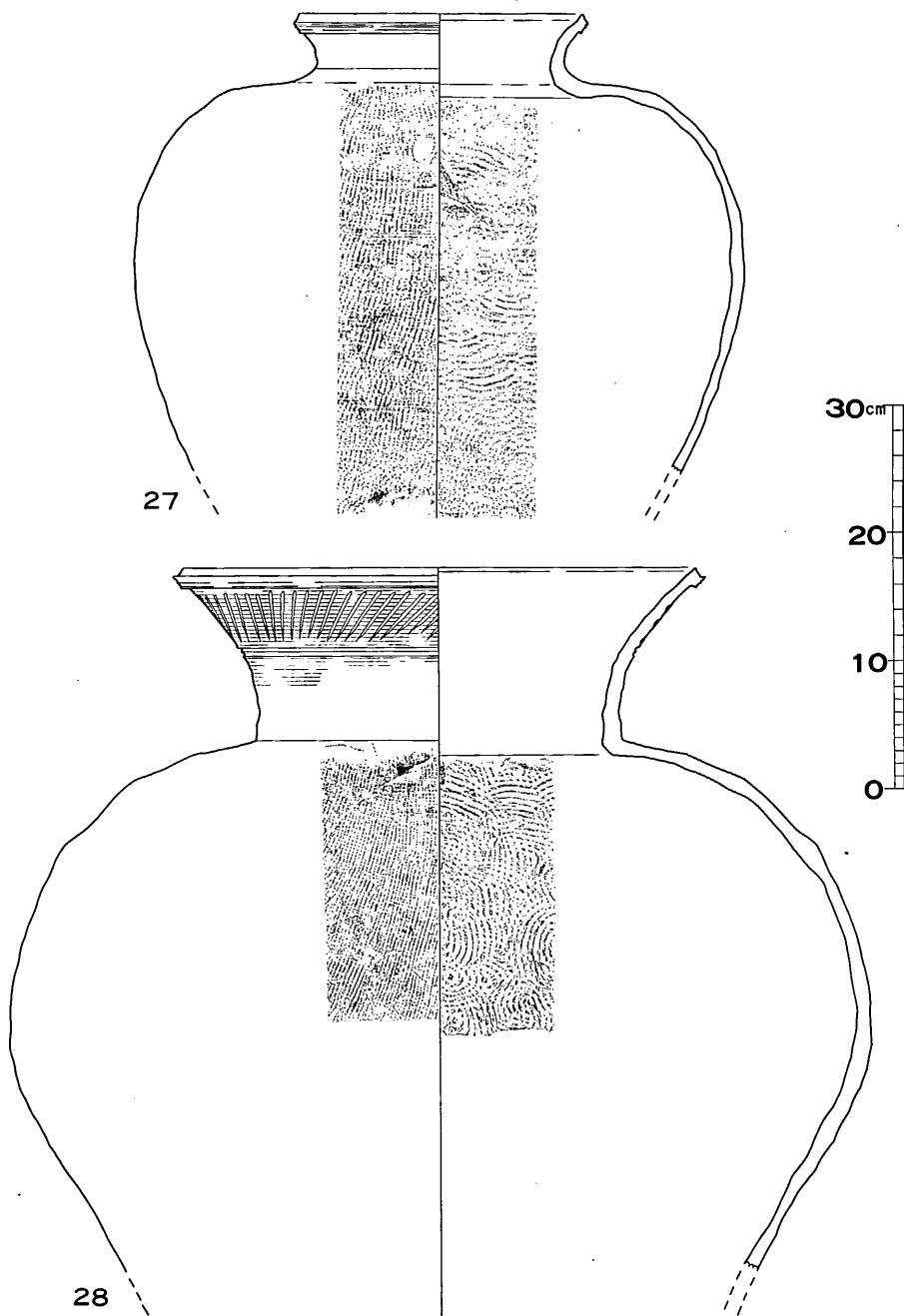
は水平に引き出される。体部には浅い凹線が2条走る。脚部は比較的高く、筒部中ほどに一条の沈線をもち、内部にはシボリ痕を残す。

無蓋高坏 坏部は深く、体部に浅い2条の凹線を施す。脚は低く、脚部下位に施された沈線を境に、あまく屈曲する。端は僅かに跳ね上る。

壺蓋 いずれもゆるやかなカーブを描いて天井部から口縁部に至り、口縁部内面はゆるく内傾する。

埴 15・16は肩部が張り、17～19は胴部中ほどが張る形態を呈す。15の肩部には2条の沈線が入り、口唇部には僅かな段をもつ。16の肩部には櫛状工具による斜行文が施され、底部は静止のへう削りが施される。

罍 20は口頸部が体部との接合部から長めに外反した後、段を作って外上方にやや外反気味に伸び端部は丸くおさまる。口縁部下の段に一条の凹線をめぐらす。頸部中ほどには2条



第12図 21号墳出土須恵器実測図（縮尺 1/6）

の沈線を施し、その上に同種のものと思われるヘラ記号を2カ所に残す。体部は断面楕円を呈し、やや肩が張る。肩部と体部中ほどに沈線ろめぐらし、その間にヘラ状工具による斜行文を施す。

23は口頸部が外反した後、内側にあまり屈曲し、端部内側に段を残す。頸部中ほどに2条の沈線を残すが、上位のものは頸部を螺旋状に一周半する。体部は断面楕円を呈す。体部中ほどには一条の沈線をめぐらし、その上から貝殻腹縁による押圧文を施す。24は口縁部が欠失し、口頸部はとりつけ後に歪む。口縁部下に1条、頸部に2条の沈線がめぐり、頸部沈線の上には櫛描波状文、下にはカキ目調整が施される。体部は断面楕円を呈し、体部中ほどに太目の沈線を2条まわし、その上下に櫛状工具による斜行文を羽状に配す。体部内には穿孔部の粘土が残り、そのまま焼成される。23は口頸部の破片で、口縁下には沈線をもつ。24・25は体部の破片で、上半に2条の沈線がめぐり、24はその間にヘラ状工具による斜行文が施される。

提瓶 26は体部前背面とも膨みをもつ。口頸部は外反して、口唇部が肥厚する。体部側面から背面にかけてカキ目調整が施される。体部内面は胎土中の空気の膨張による凹凸が激しい。

表－2

21号墳出土土器観察表

(単位：cm)

番号	器 種	色 調	胎 土	焼 成	器 高	口 径	受 部 径	口クロ方向
1	坏 蓋	青 灰 色	微 砂 粒 混	良 好	—	(15.0)	—	右 廻 り
2	〃	〃	砂 粒 混	〃	(3.9)	(13.0)	—	右 廻 り
3	〃	淡 青 灰 色	〃	〃	3.4	12.0	—	〃
4	坏 身	青 灰 色	砂 粒 少	〃	4.7	12.2	14.3	〃
5	〃	淡 青 灰 色	砂 粒 混	堅 密	4.3	11.6	13.7	〃
6	〃	暗 青 灰 色	砂 粒 多	良 好	4.4	10.2	12.6	—
7	〃	青 灰 色	砂 粒 混	〃	—	10.6	13.0	—
8	高 坏 蓋	淡 灰 色	〃	甘 い	4.5	(12.8)	—	右 廻 り
9	有蓋高坏	淡 灰 色	〃	〃	11.3	(11.5)	(13.4)	—
10	〃	暗 褐 色	砂 粒 多	良 好	—	11.4	14.0	右 廻 り
11	〃	暗 青 灰 色	〃	〃	14.5	(13.8)	(15.6)	〃
12	無蓋高坏	濃 青 灰 色	砂 粒 少	〃	11.6	(12.6)	—	—
13	壺 蓋	淡 青 灰 色	微 砂 粒 混	や や 甘 い	2.8	7.8	—	—
14	〃	〃	〃	良 好	2.6	(9.0)	—	—
								体部最大径
15	埴	青 灰 色	砂 粒 混	良 好	6.9	5.4	10.9	右 廻 り
16	〃	暗 赤 褐 色	〃	〃	6.1	6.4	10.5	—
17	〃	灰 褐 色	砂 粒 少	〃	(6.9)	(5.4)	(10.2)	右 廻 り
18	〃	黄 灰 色	〃	〃	7.0	5.4	10.5	〃
19	〃	淡 青 灰 色	砂 粒 混	〃	—	6.0	9.4	—
20	罍	暗 茶 褐 色	砂 粒 多	〃	16.6	(11.4)	9.4	右 廻 り
21	〃	暗 青 灰 色	砂 粒 混	〃	(15.9)	(11.4)	(10.4)	左 廻 り
22	〃	淡 青 灰 色	砂 粒 多	〃	—	—	8.9	〃
23	〃	青 灰 色	砂 粒 混	〃	—	12.6	—	〃
24	〃	暗 赤 褐 色	〃	〃	—	9.4	—	右 廻 り
25	〃	暗 青 灰 色	〃	〃	—	10.0	—	左 廻 り
26	提 瓶	淡 青 灰 色	〃	〃	12.6	6.8	8～9.8	右 廻 り
27	甕	濃～淡青灰	〃	〃	—	(21.8)	(47.0)	—
28	〃	青 灰 色	〃	〃	—	41.0	66.4	—

甕 27は中形甕で、体部は肩が張ってゆるくすばまる。口頸部は短く外反し、外面に肥厚した口唇部に一条の凹線をめぐらす。28は大形甕で、口頸部は高く外反する。口唇部は外側に肥厚し、端部は上に引き出される。頸部はカキ目調整の後、二条の凹線をめぐらし、口縁部との間にヘラ状工具による斜行文を施す。体部は27・28ともに外面に平行叩き目、内面に同心円文が残る。

3. B群22号墳の調査

墳丘(第16図 図版5-1・2) 22号墳は今回調査地域の最頂部に位置し、標高80m 25cmの等高線が頂部をめぐる。

南に21号墳、1号・2号石棺墓、北に23号墳、東に本墳よりやや規模の大きい26号墳(調査区外のため今回未調査)、西に木棺墓が近接する。

墳丘は盗掘などの何ら、人為的な手は加えられておらず、マウンド全体の残存状況は良い。墳丘測量の結果によると、南北13m、東西15mのやや長方形を呈し、高さ1.8mとなり、全体的に北側が本来の形をとどめているが、南側が後の21号墳築造の影響もあってか、ややくずれた感じを受ける。

また、墳丘の外部には墳裾部の北西側に幅1.5m、深さ0.4mの周溝と、南側にそれと同規模の周溝を有していたと考えられるが大半は21号墳築造時に破壊を受けて実数は不明である。

北側周溝内より器体半分を欠損した土師器の広口壺が出土した。溝底より5cm程度浮いていたことから恐らく墳丘部からの流れ込みと考えられる。また、遺物の所で詳細はふれるが他に3個体分の土師器片が墳丘裾付近から出土した。

ここで、墳丘の築造について観察してみると(第16図)自然丘の裾部周囲を方形に削り出し、墳丘東側はU字状に幅広くとられる。南側や西側は墳丘の残りが悪く明瞭さを欠くが、東側から南側にかけて墳丘中位に平坦面をもつ。墳丘頂部へ続く斜面との屈曲部が旧表土部にあたるため、地山整形段階において、上部に広い平坦面がとれるように台状に削り出し、その中央に盛土して断面凸状の墳丘を構築したとも考えられるが、比較的良好な残りを示す北面についてみると、削りだされた部分は逆弧状を呈し、そのすぐ上から旧表土を狭んで盛土されることから前述の墳形には疑問が残り、段をもたない截頭方錐形を呈する可能性もある。

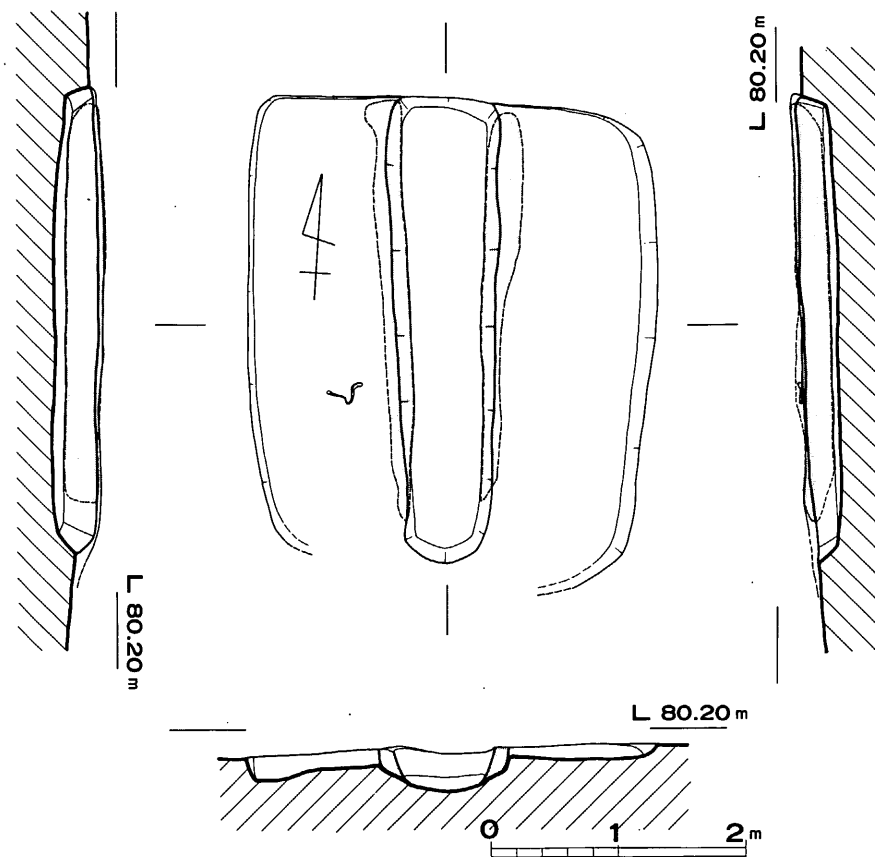
次に封土の盛り方について第16図で観察すると、まず旧地表の上に、墳丘裾部外縁より、明褐色土を東西側を厚く南を除く3方向に盛り、ついで暗褐色土を中心部西側に盛(ひく)ることにより墳丘上面を平坦にし、次いで淡茶褐色土、茶褐色土も中心部西側を特におしかためて盛っている。内部主体は、この茶褐色土より一部旧地表面まで掘り込まれている。最後に明茶褐色土、暗褐色土を盛って完成し、旧地表面より約45cmの盛土であるが、先にも述べたように墳頂部南側がかなり流出していること、また、立木の株などにより南側墳丘の十分

な観察はでき得なかったが、本来の盛土は約60cm近かったものと考えられる。

内部主体 墳丘部は平坦にうかがえたが、覆土を除去していくと、中心部は南側へゆるやかに傾斜していて、墳丘部は東西4m、南北5mと復原でき、裾部のプランと逆になる。

主体部(第13図)の残存状態は予想よりも悪いものであった。墓域は墳頂部南側に位置し、南側が流れていて実数は測りえなかったが、長軸200cm前後、短軸を160cm程とする隅丸方形を呈し、断面形は西側がやや深いものの10cm前後掘り下げていて、さらに、その中央部に主体部を設置するために短軸線断面を舟底状に10~15cm掘り下げている。

主体部は墓域北側に戸口部を共用するかのよう、長軸中心線の方位をN-4°-Eにとり外法長185cm、同幅北側で45cm、南側で32cmを測り、東西両側面に上部と北側を厚めに青灰色の粘土があり、両戸口部と棺底にまでは粘土はまわっていなかった。短軸線の断面が舟底状を示すことから、もと割竹形の木棺が棺に使用されたことが推測され、主体部内を精査したが全面に朱がつまっていただけで何ら遺物はもたなかった。



第13図 22号墳主体部実測図 (縮尺 1/30)

以上のことから、主体部に粘土が両側壁しか存在しないことなど疑問点は残り、早計かもしれないが、一応ここでは割竹形木棺であることにしておきたい。

また、棺設置ののちに、墓壙は青灰色の粘土まじりの土で補強され、その埋土上部より被葬者の副葬品と考えられる鉄器が出土した。

また、被葬者の頭位については、資料の乏しい状況であるので不明である。

遺 物

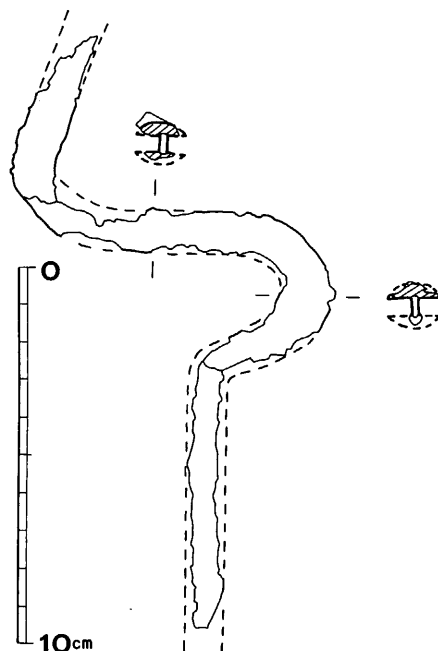
出土状況(図版6-2・3) 出土遺物は主体部墓壙上面の鉄器と北側周溝内よりの広口壺に、21号墳墳丘内より土師器の甕形土器、小形丸底埴土器片が出土した。また、1号石棺墓付近から土師器の複合口縁をもつ壺形土器片が出土した。周溝内出土の土器を除いては全て小片で表面の風化もいちぢるしく、図上の復元を行い、詳細な観察は困難であった。また、この出土状態から見るかぎり22号墳は築造後早い時間に周囲の溝も埋り、その後墳丘部付近より土器が落ちた可能性が強く、特に南側部は流出した後に、21号墳の築造が行なわれ、それらの土器も21号墳墳丘内に入ったと考えられる。ただ、1号石棺墓付近出土の土器について、一応22号墳関係の土器としておくが1号石棺墓との関係も深いものがあると思われる。

出土遺物

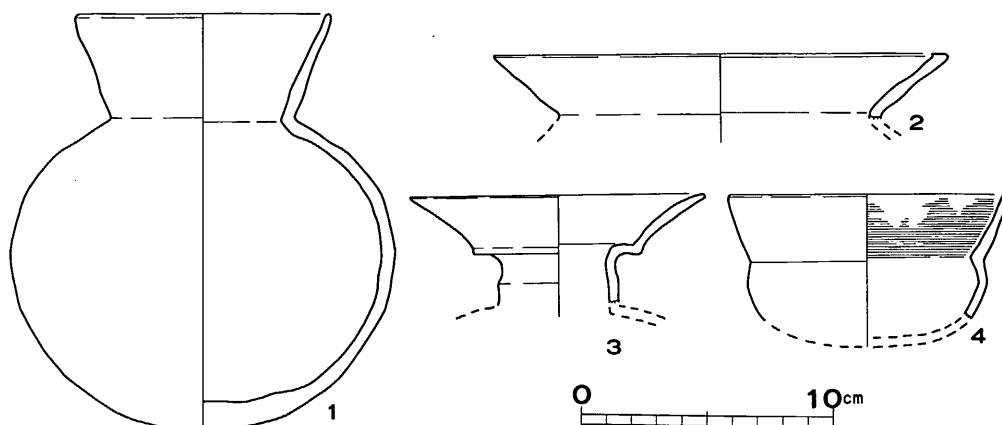
(1) 鉄 器	不明鉄器	1 個体
(2) 土師器	壺形土器	3 個体
	甕形土器	1 個体
	器 台	1 個体
	高 坏	1 個体
	小形丸底埴	1 個体

鉄 器

不明鉄器(第14図・図版19-1) 現存長は19.6cmで上下端部を欠損している。平面形は垂直部が8.7cm残り、その上端よりゆるやかに右へ60°曲げ、それより左方向に大きく湾曲させ下部の垂直部に対し、ほぼ90°近くなり、また上方へ100°近く湾曲させ最上部に達している。断面形を見ると2×6mmの平板の短辺の両端に半円形のを接着し、7×8mmのだ円形状の棒のようなものを作りあげ、それに木質をはさみ込み、図14のように曲げて完成したものであろうか。鉄の材質は平板状のものは純度も高く腐食も少なく、半円形のは砂粒を多く含む腐食もいちぢるしい。



第14図 22号墳出土鉄器実測図(縮尺 1/2)



第15図 22号墳出土土師器実測図（縮尺 1/3）

以上、鉄器の状況であるが、用途、種類については不明である。

土 器

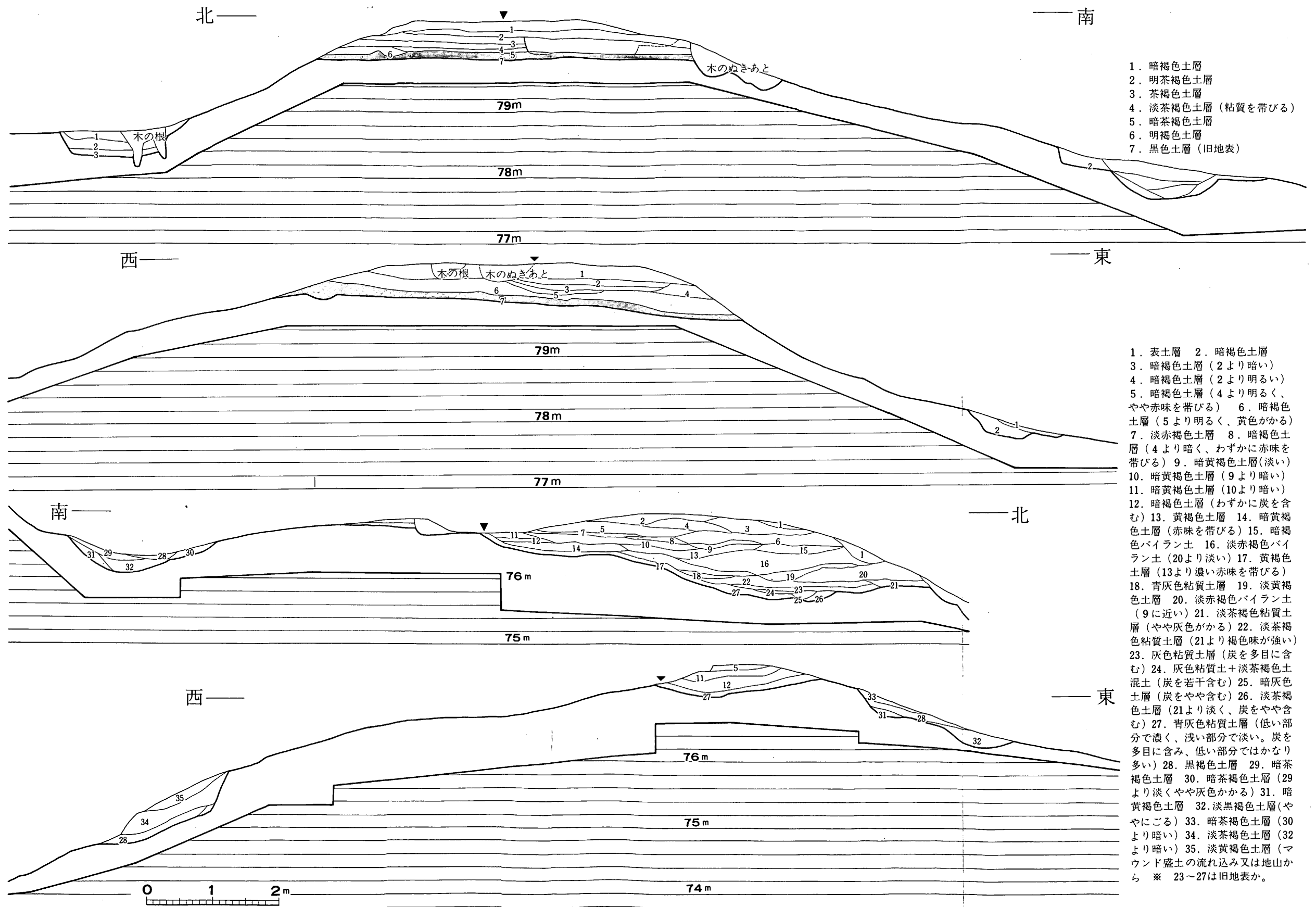
壺形土器（第15図1・3 図版—4） 1は器体の約半分を欠損しているが、口縁部より底部まで残っている広口壺である。器高は16.5cm、口縁部径10.2cm、頸部径7.4cm、胴部最大径15.3cmを測り、全体的に底部は厚く1.1cmで、内面に指圧痕であるか凹凸がある。胴部はほぼ球形で最大径も中位にあり器壁は4mm程である。

ただちに頸部にすぼまり、頸部内面に稜をもつほど外反しながら直線的に口縁部にいたる。口縁部中位に指圧の調整で、やや薄くひきしめられている。色調は胴部上位に黒斑を見るものの淡赤褐色を呈す。胎土はかなり大粒（2mm）の石英・砂粒を含むが精良である。焼成はあまい。調整は内外面ともに風化していて不明である。3は複合口縁の壺形土器で、器体の頸部下は失損し、残存部も小片である。

口縁復原径は11.8cmで頸部は直立するものの中位でややすぼり口縁部へ大きく外反し平坦面をもち、ゆるやかに外反し端部にいたる。調整は内外面とも風化がひどいが、内面はハケ目を横方向に行い、外面はヘラナデを横方向に施している。色調は淡赤褐色を示す。胎土は微砂粒を含むが精良。焼成はあまい。

甕形土器（第15図—2） 口縁部のみの小片であり、口径を復原すると18cm前後となる。口縁中位において指圧によりやや細まり上方につまみ上げられ口縁端部において平坦に仕上げられ内面に稜をもつ。内外面の調整は横ナデされている形跡が見られる。色調は淡黄褐色を示し、胎土は微砂粒を含む。焼成は不良である。

小形丸底埴（第15図—4） 胴部より下を失損した小片である。復原口径は11cm、器高6cm程である。胴部最大径は中位より上にあり、すぐ頸部にすぼまり、口縁部へ内湾ぎみに外反し端部にいたる。調整は口縁部外面に横方向のヘラナデを内面は細いハケ目が横方向に入る



第16図 22・23号墳丘断面図 (縮尺 1/60)

胴部については不明である。色調は赤褐色を呈し、胎土は微砂粒を含むが精良である。焼成は良好である。

以上が、22号墳出土の土器である。全て、小破片で詳細な観察はできなかったが、いわゆる古式土師器に入るものである。

4. B群23号墳の調査

墳丘(第16図 図版7(1)) 22号墳の北側の尾根線上に位置する。墳丘西側の封土の流出が著しく、また北側裾部は24号墳の地山整形の際にカットされる。墳丘構築にあたっては22号墳同様地山整形を行ない、その後に盛土する。地山整形は裾部を台状に削り出し、方形のプランを整える。特に南側は尾根を切断し、墳丘を際立たせるため、幅広くとられる。さらにその外側に浅い周溝をめぐるすが、墳丘北・東側の断面から観察される。墳丘西側では東側周溝より1.5m低い所に60cm程度の段落ちが認められた。

盛土はカットされた南側を除き、旧地表上に行なわれ、低い北側に厚く盛り、土止めとしながら間を入念に埋め、封土を構築する。

内部主体(第17図 図版7(2)(3)) 2基の主体部が認められたが、墳頂部も流失が著しく、主体の残存程度としては22～25号墳中、最も不良であった。

1号主体部は、ほぼ尾根線上に設置されるが、棺の底部を残すのみである。主軸はN-25°-Wにとり、南側に朱が多く残る。中ほどは木根によって破壊されるが、他部分の断面は舟底状を呈することから割竹形木棺と推測される。残存部は3.9mほどであるが、さらに両端が延びると思われる。

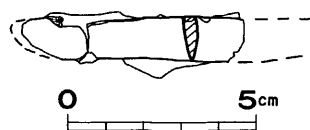
2号主体部 1号主体部の南側約2mの所で確認された。半円形に薄く粘土を残すのみで、22号墳のやや南に、北側方向に延びていたものと推測される。

遺物(第18図 図版7(3) 19(2) 20(2)) 1号主体部の底に近い部分から刀子が1口出土した。刀子は水平を保っていないことや、主体部の残存状態などから原位置をとどめているとは考え難い。また北側周溝の底に近い部分からスクレイパー、墳丘上の表土層から石斧と磨石が出土した。

出土遺物

(1)	鉄器	刀子	1口
(2)	石器	スクレイパー	1点
		石斧	1点
		磨石	1点

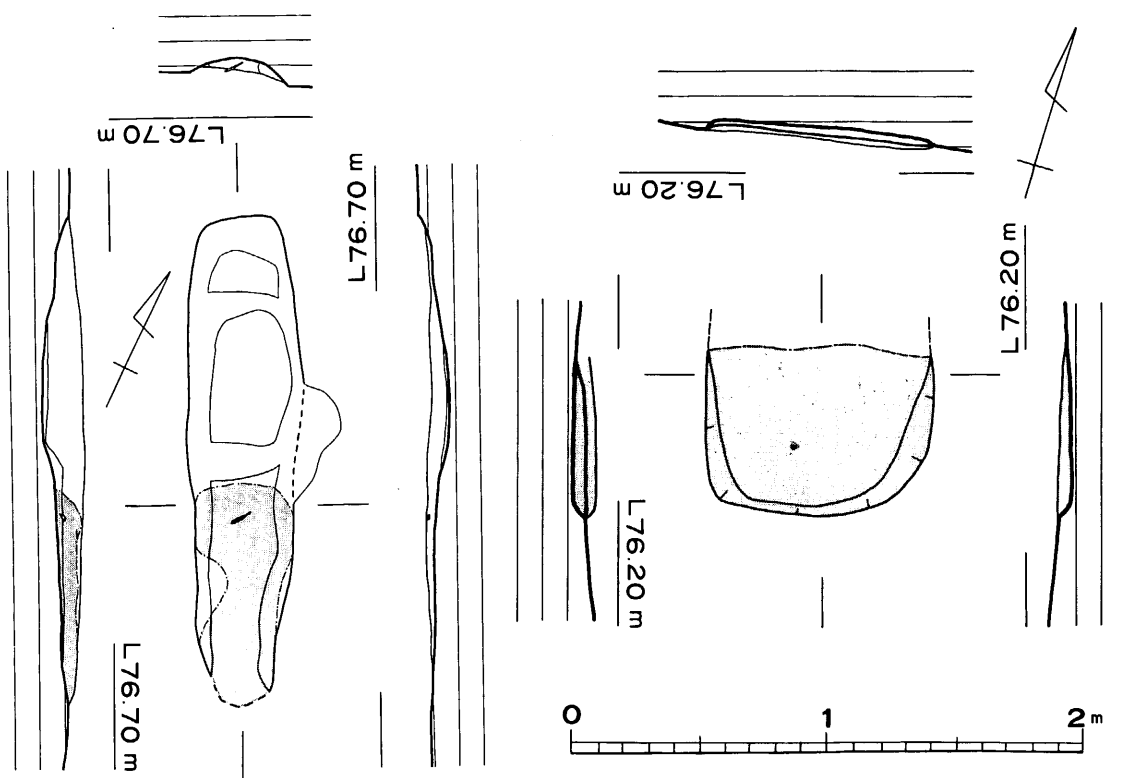
刀子 刀子は2つに折れて出土したが、資料整理の過程で茎部が紛失した。残存する身部は長さ5.8cmを



第17図 23号墳1号主体部出土鉄器実測図(縮尺 1/2)

計り、写真などから 9.5 cm程度と推測される。身部には木製の鞘が僅かに残る。

石器 石器については、「8 遺跡出土の石器」の項で詳しく述べる。



第18図 23号墳主体部実測（左；1号主体部，右；2号主体部）

5. B群24号墳の調査

墳丘(第23図 図版8(1)) 23号墳の北裾を切って構築される。墳丘はかなり流失し、不明瞭であり、本墳北裾は25号墳に切られる。墳丘構築にあたっては22・23号墳と同様に地山整形を行ない、その後に盛土する。

地山整形は墳丘南側と西側に僅かに残る程度であるが、23号墳と同様の地山整形と思われる。裾部は台形状に削り出され、その外側に周溝を掘る。西側ではさらに1.5mほど外に段落ち状に削り出すのが認められた。

盛土は墳頂部南側に若干残る程度で、よくしめられた3つの層のみが認められたにとどまる。墳丘の規模は内部主体が墳丘中央にあると仮定すれば、周溝の内側で東西8m、南北6～7m、外側の段落ち部で東西13cmと推定され、墳形は方形を呈すと思われる。

内部主体(第19図 図版8(1)(3) 9(1)) 内部主体は1基で、墳丘のほぼ中央に位置する。南北3.4m、東西1.64mの隅丸方形のプランの墓域内に設置された割竹形木棺よりなる。主軸はN-22°-Wにとり、現況で墓域は地山に40cm程度掘り込まれ、南隅は木根により攪乱を受ける。棺は全長2.55m、幅60cm程度と推定され、この部分の底は僅かに下がる。周囲は裏込め粘土でしっかりと固定され、墓域一面に広がる。

棺部の断面は舟底状を呈す。朱は僅かに南側上面でみられたが、その下は不整形に5cmほど低くなっている。棺の中央部は盗掘、または何らかの攪乱を受ける。

遺物(第20～22図 図版9(2) 20(1)) 遺物は主体部から鏡片3点、土師器1点、南側周溝から土師器甕などが出土したほか、北側からも二重口縁壺の口縁部が出土した。

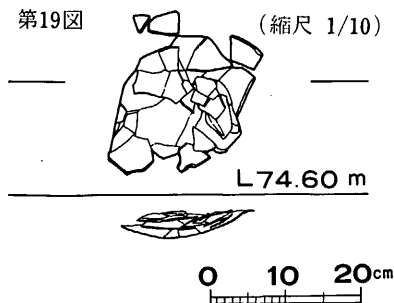
鏡片はそれぞれ別の場所から出土した。縁から内区にわたる中くらいの破片は表土下部から、外区を中心とする小さな破片は棺の南側から30cm程度底から浮いて出土し、鈕座が残る最も大きな破片は棺中央の床面直上から出土した。これらは攪乱の際に1つの鏡片が割られ、とばされたものであるが、床面直上から出土した鏡片は若干の動きはあるにせよほぼ原位置をとどめているものと思われる。この時期は断面の観察から、さほど新しいものではないと推定される。

北側周溝より出土した土師器は、墳丘よりの床面直上の層から、つぶれたような状態で出土した。

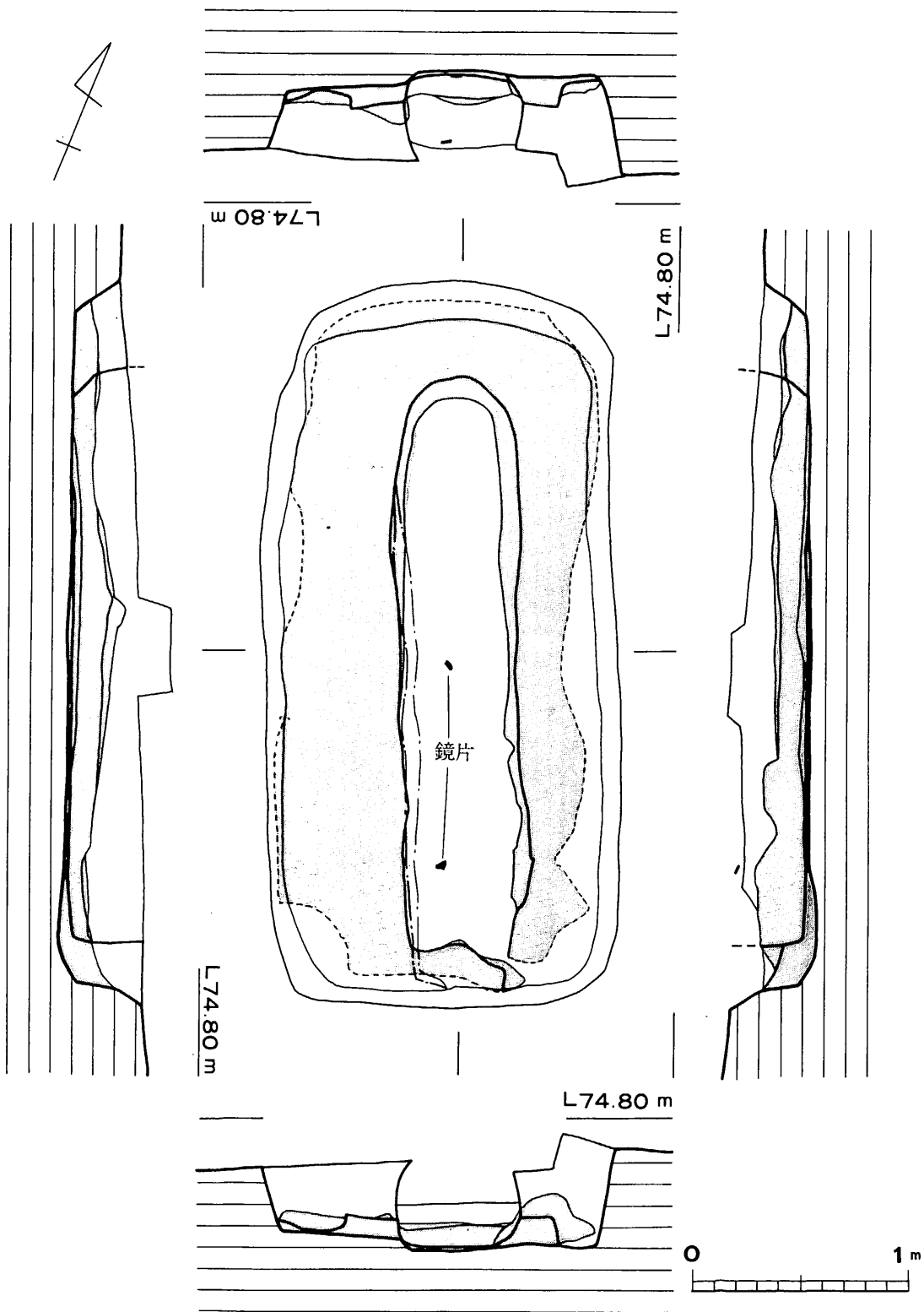
出土遺物

- | | | |
|---------|------|------------|
| (1) 鏡片 | 変形鏡 | 1片(3つに割れる) |
| (2) 土師器 | 甕形土器 | 1個体 |
| | 壺形土器 | 1個体 |

鏡片 面径11cm程度の鏡を割って使用したもので、折



24号墳周溝土器出土状態実測図



第20図 24号墳主体部実測図（縮尺 1/30）

面はいずれも丹念に磨かれ、鈕座の近くに穿孔する。孔は縁と反対側がすれており、ひもなどで、縁を下にしてつり下げていたものと思われる。

縁厚約2mm、反りも僅かで約2mm弱を計る平縁の鏡片である。

鏡背は鈕を欠き、鋳上りは減り張りがなく、あまり良くない。鈕座には蝙蝠座を配し、内区は内縁を鋸歯文、外縁に不明瞭であるが内行花文を意識したような台形文がある。外区には円文と3本の尾を巴文状に組合わせた文様が配され、その尾は上向きと下向きに交互に配されるものと思われる。



第21図 24号墳出土鏡片実測図（縮尺 2/3）

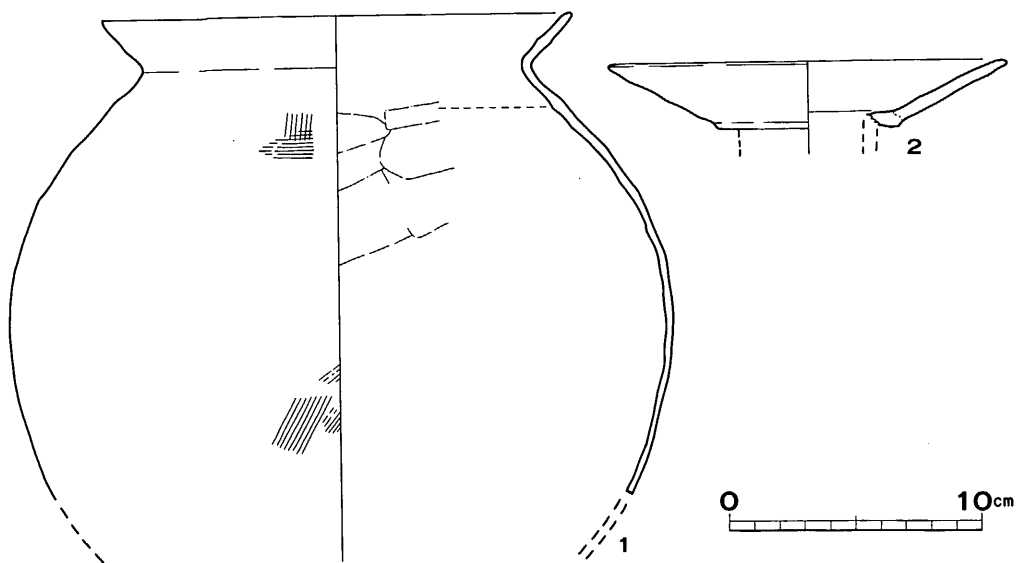
る。この種の鈕座をもつものとしては内行花文鏡、方格規矩鏡などが代表的なものとしてあげられるが、かりに内区外縁の文様から内行花文鏡の系統をかたどるものとすれば、外区内縁は結節と松葉文の簡略形とみることもできよう。

土 師 器

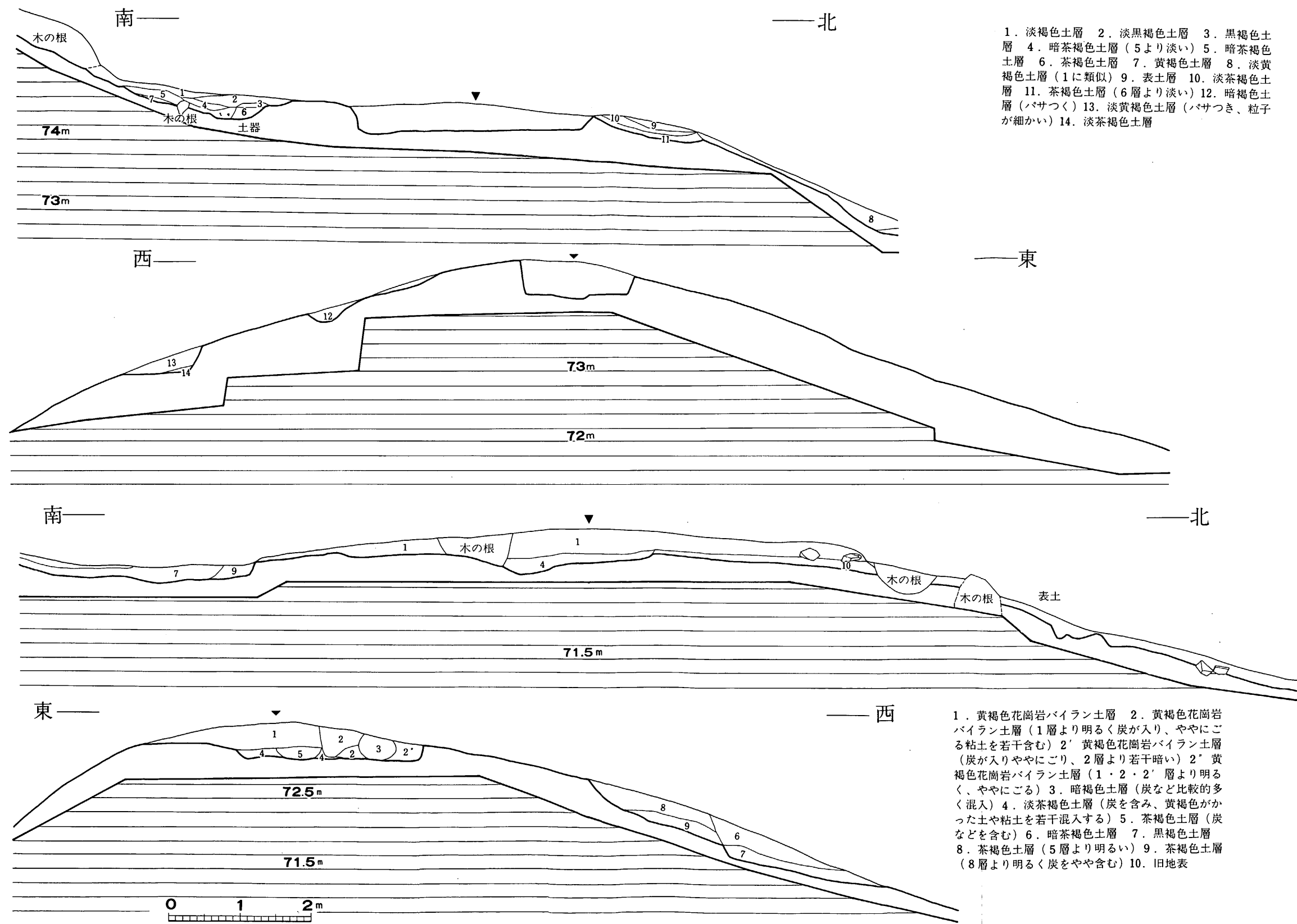
甕形土器(1) 口径18.8cm、胴部最大径24.6cmと推定される。口縁部は「く」の字状を呈し、口唇部は平坦におさまる。胴部は肩部が下る球状を呈し、下半の一部にはススの付着が認められる。肩部はハケに近い細いタタキが施され、下半にはハケ目が認められる。内面は屈曲部のやや下からヘラ削りが施され、器壁を薄く仕上げる。胎土は1～2mm大の砂粒が多目に混入され、色調は黄褐色を呈す。焼成はほぼ良好である。

壺形土器(2) 二重口縁壺の口縁部である。口径は15.6cmと推定される。ほぼ直線的に外傾し、口唇部は丸くおさまる。

ほかに主体部床面近くから土器片が出土したが、供献されたものではない。詳細は小片のうえ磨滅しているため明らかにしえない。



第22図 24号墳出土土師器実測図（縮尺 1/3）



第23図 24・25墳丘断面図 (縮尺 1/60)

6. B群25号墳の調査

墳丘(第23図 図版10(1))

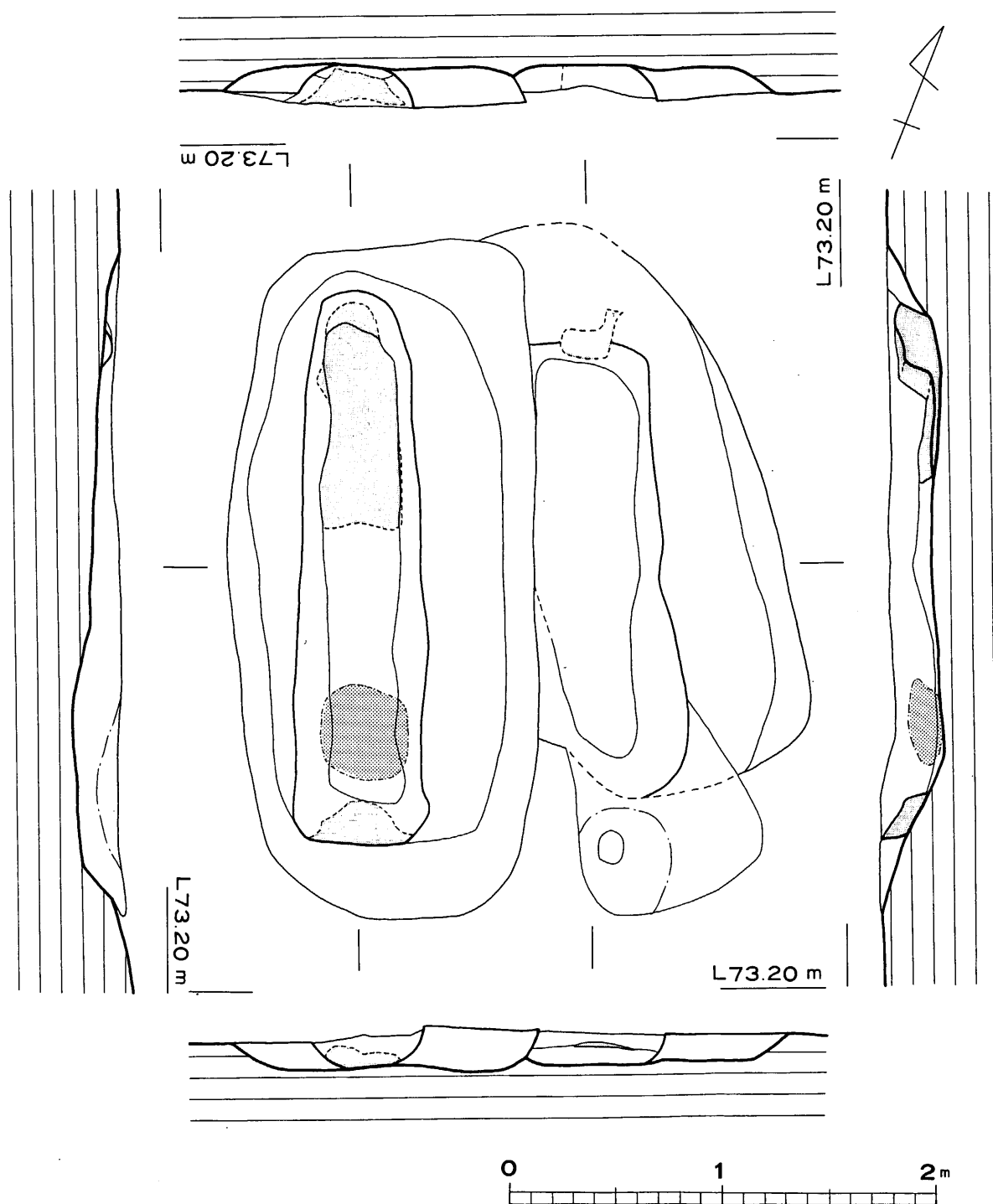
尾根の北端に位置する。墳丘は流失により欠失するが、特に東側は著しい。また北側には礫が多く散乱し、地山は不整いである。墳丘築造においては基本的に22～24号墳と同様で、地山整形の後、盛土するものである。南側は尾根を切断するため幅広く掘られ、段落ち状に削り出される西側へ続く。25号墳は、再度つくりなおして使用し、尾根の切断部は南へ0.2 m、段落ち部は西側へ1.8 m張り出して構築される。墳丘の規模は主体部を中心として考えた場合、いずれも一辺10m弱と推測される。本墳は墳丘の大半が欠失しているとはいえ、23・24号墳にみられるような周溝や、その外側につくられた段落ちもみられなかった。このことはこの尾根上に墳丘構築に必要な面積が得られなかった地形の制約により、本来もっていなかったのではなからうか。新たに埋葬が行なわれる際、以前あった墳丘をつくりなおして、埋置しているところも、23号墳などにみられる複数の主体部をもつ墳丘とは異なり、前述の点を示唆するものと考えるとともに、22号墳から23→24→25号墳としだいに規模が小さくなることの背景も一つの要因といえよう。

盛土は大半が欠失し明確ではないが、北側に旧表土を残して盛土されることから、墳丘は主体設置予定部分を基準に平坦面を作り、盛土をしたと思われる。

内部主体(第24図)

主体部は2基あり、2号主体部が1号主体部を切る。2号主体部は南北3.15m、東西1.45mの略隅丸方形のプランの墓壇内に設置された割竹形木棺よりなる。主軸はN-22°Wにとり、現況で墓壇は地山に20cmほど掘り込まれる。棺は全長2m、幅60cm程度と推定され、両端を裏込め粘土でおさえ、北側は棺の下にも粘土を敷く。側面は花崗岩パイラン土で埋め、棺部の断面は舟底状を呈す。棺の南側には径40cm程度の範囲に朱が残り、床の南半はやや低い。

1号主体部は、棺の西端部まで2号主体部に切られ、墓壇の南北は木根の攪乱のため不明確である。主軸はN-25°Wと推定される。棺設置部の底は僅かに下り、北側に若干の裏込め粘土が残る。この粘土から、南側攪乱端部まで2.6mを計り、棺の長さはこの数値を超えない。



第24図 25号墳主体部実測図（右；1号主体部，左；2号主体部）（縮尺 1/30）

7. その他の遺構

遺構の配置と経緯(第25図)

本遺跡は前項までに記したように、横穴式石室をもつ21号墳、台状の低墳丘をもつ22～25号墳などのみとはじめ考えられていたが、表土除去作業のおり、数カ所土壌らしいものが観察された。完掘の結果、土壌となりえたのは22号墳西側周溝より約6mの所にあった木棺墓のみであった。また、21号墳墳丘観察の際、墳丘地山下より1・2号石棺墓が発見され、その後墳丘周辺部を精査したが他には検出されなかった。

これら3基は、22号墳の西・南の周溝外部より2～6mの距離にあり、21号墳より古いことがいえる。各遺構については以下で詳細にふれて見ることにする。

木棺墓(第26図 図版-10-3)

22号墳西側の比較的急な斜面に直交するように構築されている。

平面形は長軸2.35m、短軸1.7m(最大)の不整だ円形を呈している。

断面形より観察すると、まず、斜面の上方(東側)部から40～50cm掘り下げ平坦面を作り、それより東・南・北の3方を垂直ぎみに、また、西側は湾曲をもちながら130cm程掘り下げ墓壇を作っていて、壇底部におけるプランは西側をレンズ状に突出した隅丸方形となる。

棺は長軸をN-16°Eに向け、西壁側に幅15cm、長さ170cm、高さ15cmの粘土を残し、対面する東側壁及び南・北両戸口部(40×15cmの範囲)にはうっすらと粘土を残していることから、戸口部を両側板がはさむ形の木棺墓であろうと推測する。また、西壁には裏ごめの土が底より約60cmほど残っており、木棺の法量は側板部140cm、戸口部40cm、高さ60cm前後である。被葬者は成人であったであろう。また、木棺墓内より何ら遺物は発見されなかった。

以上のことから、この木棺墓は比較的構築しにくい斜面を利用し、しかも130cmも掘り下げているため特に、東側壁ぎりぎりに棺を造営し、両戸口部を置き、最後に西側壁部を強力に補強するために、特に粘土を厚く置き、作りあげている。

1号石棺墓(第27図 図版-11)

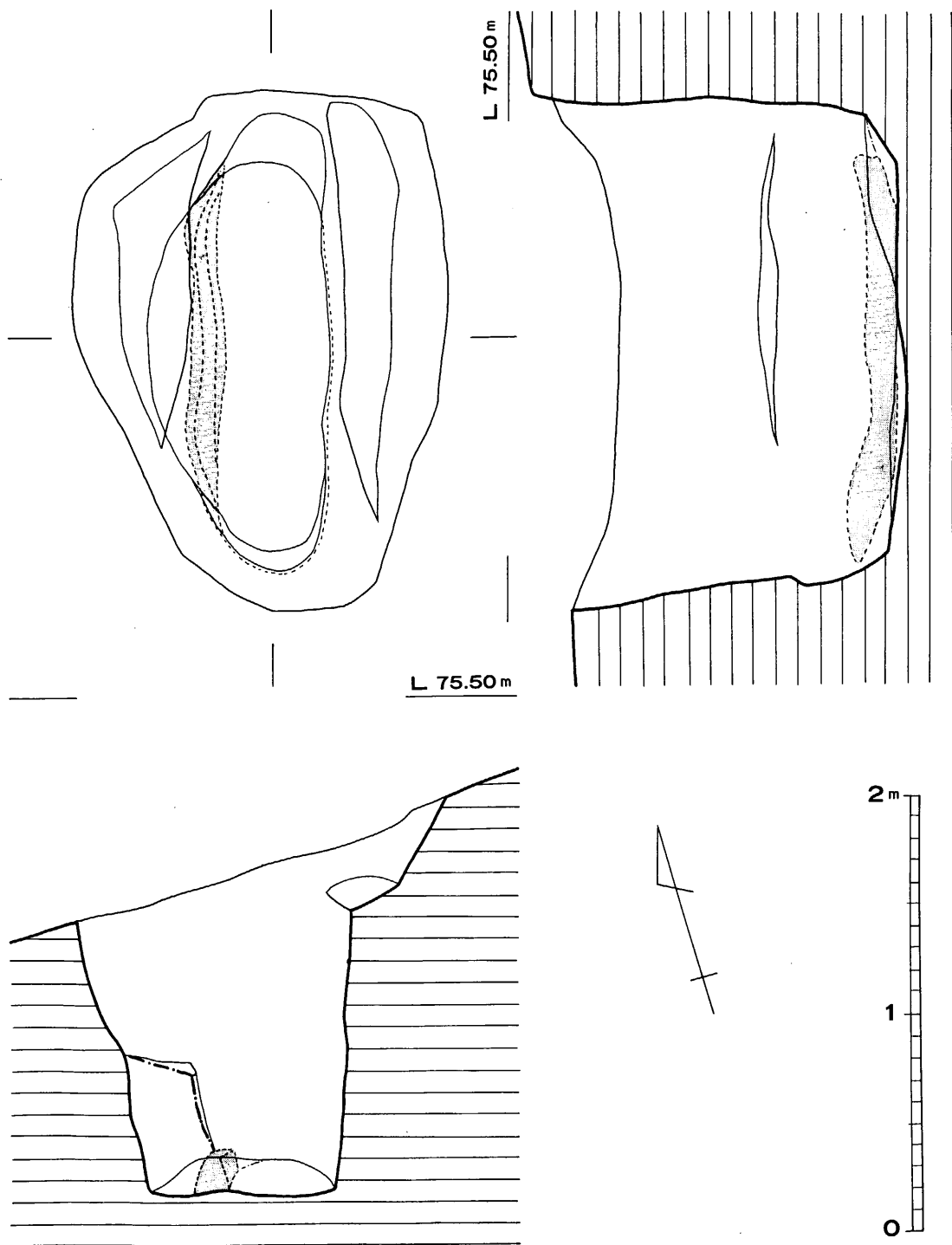
21号墳西側墳丘下より出土した箱式石棺墓である。墓壇は21号墳墳丘築造の際削平されて不明である。

棺は長軸を西に向け、地山を約40cm程掘り下げ、後に四方に置く石に合せて掘り下げ北壁側はやや張るものの230×75cmの略方形を呈し、底面は平坦である。

石材を観察すると南壁側に一番大きい方形の石を用い掘り方もせまい。また戸口及び北壁については比較的小ぶりの石を用いて作りも雑であり、石の埋め込みは浅く1/4程度であり、北壁と両戸口部しか行っておらず極めて不安の残る作りである。蓋石については、不整形の大石を5枚用いて、その隙間を小石でつめ、中心部3枚に粘土により目づめを行っている。

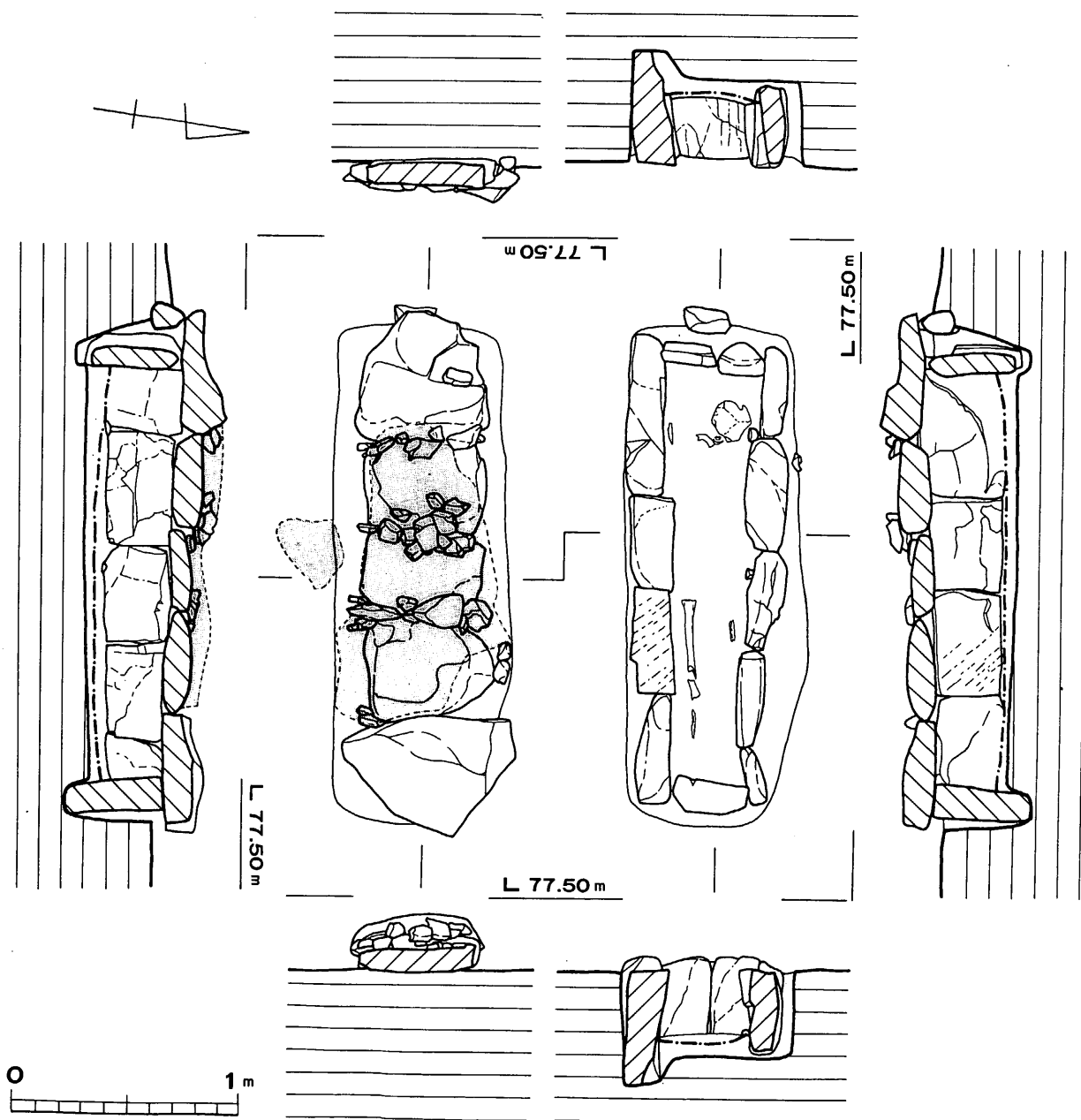


第25図 22号墳・木棺墓・石棺墓旧地形測量図（縮尺 1/200）



第26図 木棺墓実測図（縮尺 1/30）

内部の法量については、戸口部40cm、側壁部 185 cm、棺高35cmを測る。主軸はS-82°-Wである。内部については、まず平坦な底に西側で10cm、平均 5 cm前後の底土がひかれ、その上面に2 mm大の花崗岩バイラン粒に赤色顔粒を付着させたものをしていた。また、棺内の壁面及



第27図 1号棺墓実測図（縮尺 1/30）

び蓋石の内面にも赤色顔料が付着していた。

遺物としては、棺内より頭部を西に向けた、一体の人骨と、頭部南より刀子1口が出土した。

最後に造り方として、裏ごめ及び石の埋め込み状況からして、南壁・戸口をはめ込み最後に北壁を立てて棺を作ったものである。

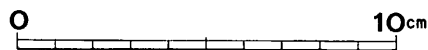
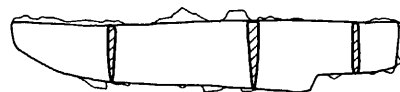
遺 物

鉄 器 刀 子 1 口

刀子(第28図 図版-19-3)

現存長10.2(身部8.2cm、茎部2cm)cm、身幅18mm

前後、棟幅2~3mmと薄く、刃関を有する平造りで、刃部は使用による摩滅でやや中位で内湾して鋭先へいたる。また、鋭先・茎部は欠損していたのではなかろうか。



第28図

1号石棺墓出土刀子実測図(縮尺 1/2)

2号石棺墓(第29図 図版-12)

21号墳墳丘裾部下より出土した箱式石棺墓であり、地山を穿って造営している。

墓壙は長軸を東西に向け2.4m、短軸は南側一部に平坦面をもつものの1.7m前後で長だ円形を示し、深さは約20cmで上部は削平されている。

石棺は墓壙のほぼ中央部に大石5枚を蓋として造営して、西側部を除いて粘土で覆っている。

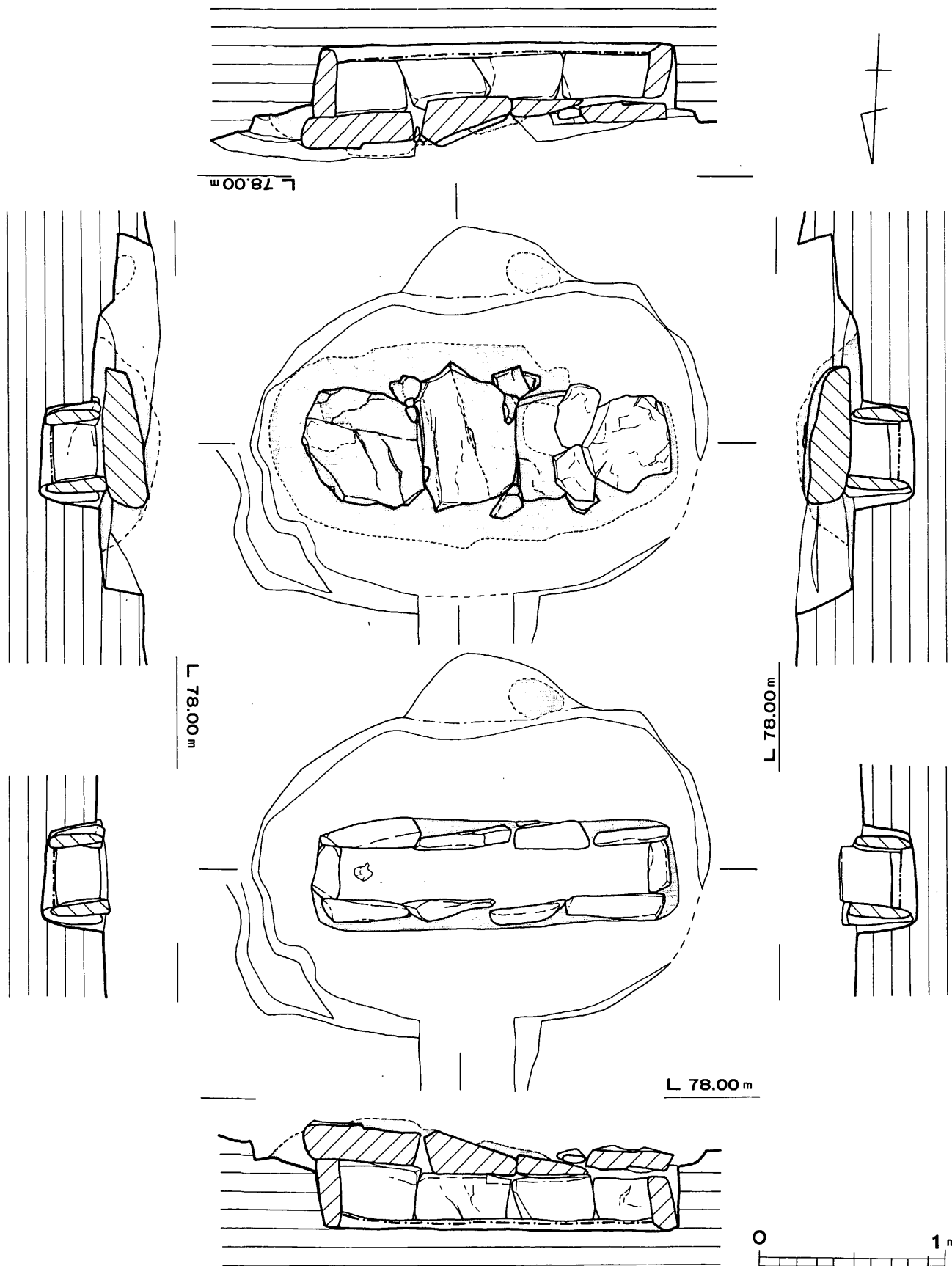
内部の法量は、N-86°Eに主軸をとり、側壁部167m、戸口部30m、棺内高は東側(頭位)で38(床土10cm)cm、西側で30(床土6cm)cmであり、底面は平坦に仕上げられている。

石材構成及び組み方については、比較的整った略長方形の石で、西側壁側は各々4個の石を列べ、戸口部は略正方形の石を使い側石よりはさみこまれ、特に側壁には粘土で強力に裏ごめされている。その他は、石に合せてか、裏ごめは少ない。

また、石の埋め込みは、側壁部、戸口部にも見られず、極めて珍しい。ただ、本市剣塚遺跡第3号箱式石棺墓には若干類似点を見る。

壙底には、1号石棺墓より多く頭位を厚く全体的に赤色顔料付着の花崗岩バイラン粒がしかれていて、壁内面は全て赤色顔料が塗られていた。内部からは、東側に側頭骨の一部が発見されただけで、他の遺物は皆無であった。このことより、この石棺の被葬者は頭を東に向けて葬られている。内法量から見ても成人用のものと考えられる。

以上、22号墳周辺より検出された遺構は木棺墓1基、石棺(箱式石棺墓)2基の合計3基である。他の類似する遺跡においては、周辺よりかなりの数の遺構が発見されているのが普通であろうが、本遺跡の立地からして平坦部は1・2号石棺墓が造営された部分のみで他は急傾斜であり、あったとすれば、もっと低位であったかとも考えられる。また、年代につい



第29図 2号石棺墓実測図 (縮尺 1/30)

ては資料のなかから決めがたく、「Ⅳまとめ」において検討を加えたい。

石棺出土の人骨について

1号石棺出土の人骨(第28・30図)

頭位を西にした仰臥伸展葬である。人骨の保存状態は石蓋に粘土を覆っていた割には悪く、頭蓋骨の頭頂部、下顎骨の半分、左大腿骨・右大腿骨(小片)・右胫骨などが、かなり風化して出土した。また頭部南脇より被葬者に対する副葬品と考えられる刀子が出土した。

この人骨について、九州大学医学部第2解剖学教室の永井昌文教授に、コメントをいただいたのでここに例記する。

頭頂骨に残る外縫合癒着がほとんどみられないこと、歯の咬耗が2度程であり・下顎骨の太さ、大腿骨の太さなども細いことから鑑定はしがたいが、年齢として30才代はじめ頃、性別は女性である可能性が強いということであった。

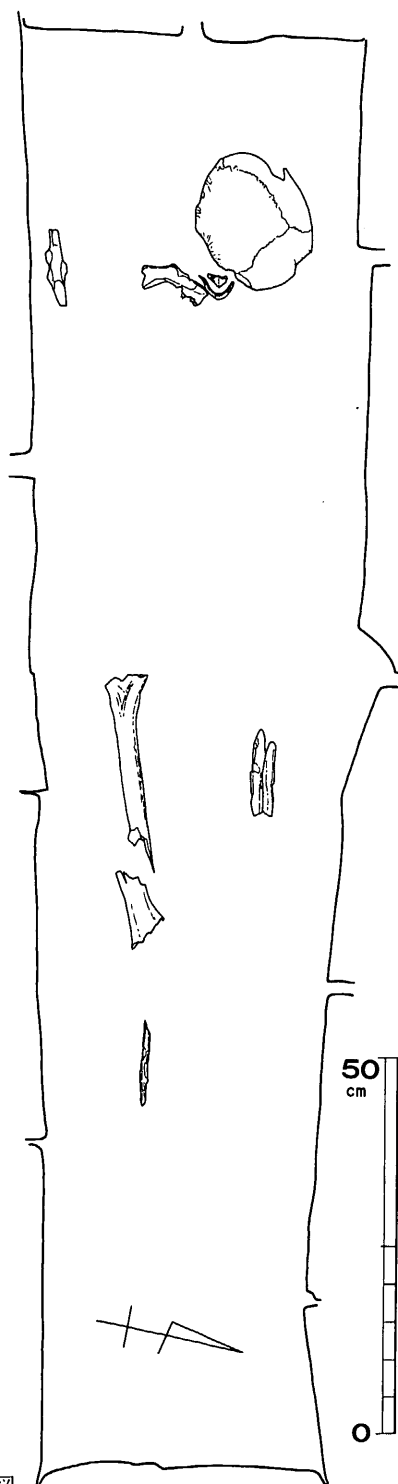
2号石棺墓出土の人骨(第29図)

被葬者は1号石棺墓人とは異なり、頭位を東しにとり仰臥伸展葬の可能性も考えられるが、人骨は右側頭部しか残っておらず、他の骨・副葬品等は皆無であった。

2号石棺人骨も九州大学医学部永井昌文教授にコメントをいただいた。

側頭部に残った乳様突起の発育からみて男性の可能性が強い。年齢については、他に骨の残りがいないことから不明としておく。

以上のように、人骨の残りの悪いところ、コメントを下さった、九州大学医学部教授永井昌文先生、他田中良之助手に感謝する次第である。



第30図

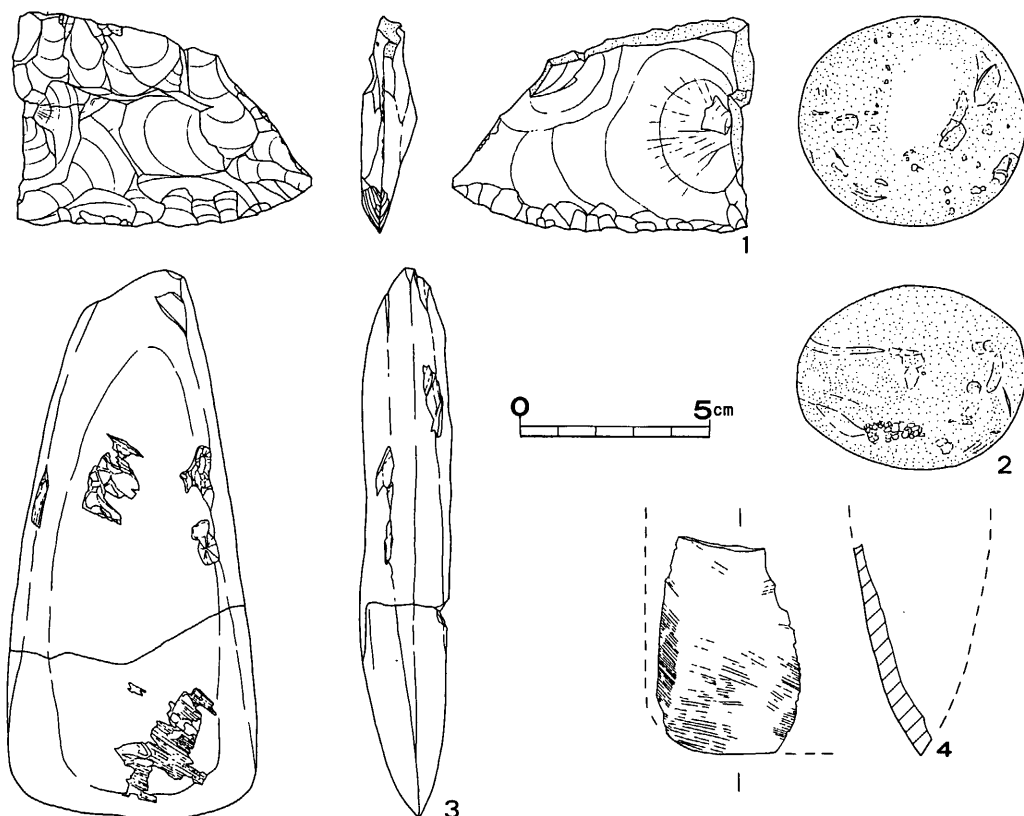
1号石棺墓人骨出土状態実測図(縮尺 1/10)

8. 遺跡出土の石器

スクレーパー (第31図-1) 23号墳周溝底より出土した。サヌカイトの縦長な剥片(8 cm)で縁部に自然面を残し、他の2辺に二次加工を施し、刃部とする。この2辺の交わるころは尖頭状を呈しドリルとして使用した可能性も考えられる。

磨石 (第31図-2) 23号墳表土中より出土した、砂岩(軟質)製の磨石である。5～6 cmのほぼ球形を呈し、上部及び周縁部を主に使用している。

磨製石斧 (第31図-3・4) 3は、体部より2つに折れた、蛇紋岩(軟質)製の良品であり、基部は23号墳表土中、刃部は表採品である。法量は器長14.5 cm、刃部長6.4 cm、器厚2.2 cm、刃角は55°で、若干剥離面を残すものの、全体的に緻密に研磨されている。4は22号墳北側周溝内より出土した刃部の小破片で、刃部の使用痕はいちぢるしい。残存長5.5 cm、刃角は60°、器厚は3.5 cmと復原でき、太形に近いものと測定される。器体は丹念に研磨されている。石材は良質な砂岩である。これら磨製石斧は22・23号墳築造に何らかの関係を持つものではなかろうか。



第31図 遺跡出土石器実測図(縮尺 1/2)

Ⅳ ま と め

1. 出土土器より見た墳墓の年代観

本遺跡より出土した土器は、21号墳を除いては全て、いわゆる古代土師器と言われる土器である。遺跡において完形品の出土はなく、多くは小破片であり、十分な表面観察ができえる状況ではなかった。しかし、出土状況などの明確に分かる22号墳北側周溝内出土の広口壺（第15図－1・図版－19－(4)）と24号墳北側周溝底面直上より出土した甕形土器（第22図－1・図版－19－(5)）を中心に検討を加えて見ることにする。

まず、広口壺（直口壺か）は器体の半分は欠損するものの全体像は把握できる土器であり、類似するものとして、久留米市祇園山古墳裾部外周より出土した広口壺（註1）と対比して見ると、22号墳出土のものより口径においてやや異なるものの、ほぼ同大であり、また、口頸部のつまみ上げ、胴部の張り球形の違いがある。

また、那珂川町今光遺跡溝2出土の土器（註2）のものにも頸部の傾斜、胴部の器形に若干の差異も認められるものの類似性はある。このことは前者（祇園山）は春日市柏田遺跡の出土例（註3）において井上氏によって編年された、柏田Ⅱ期に相当するとされ、また、後者（今光）は、その遺跡編年（註4）において溝2出土土器はⅣ・Ⅴ期に編入されている。

また、大阪府東大阪市に所在する爪生堂遺跡土器溜2（註5）より類似した土器が出土しており報告書によると庄内式の新しい方に位置づけられている。

このことから、壺形土器による対比だけでは4世紀後半～5世紀初頭という広い範囲となるが、22号墳には小片であるが、甕形土器（第15図－2）複合口縁壺（第15図－3）小形丸底埴（第15図－4）からしても古い様相を残すものの甕形土器口縁部つまみ上げによる端部の不完全さ、複合口縁頸部外面に段もないなど細部については新しい様相を示すことから、一応、柏田Ⅱ期併行期としておく。

また、24号墳北側溝底より出土した甕形土器は胴部下半を欠損しているため全体像は判然としないものの丸底になるものと考え。この土器について、前述の久留米市祇園山古墳裾部外周出土のもの（註6）や那珂川町恵子若山遺跡円墳出土のもの（註7）と比較すると胴部球状を呈する状態からして、24号墳の方が若干であるが新しい感を受け柏田編年という柏田Ⅲ期併行期かやや新しい時期と考える。

以上のことから実年代を与えるには、資料的に多くの疑問点を残すものの22号墳については4世紀後葉～4世紀末とし、24号墳については5世紀初頭～5世紀前半と推察した。

註1 福岡県教育委員会編 石山勲 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ⅩⅩⅦ1979同報告書P-83、Fig74-14の土器をさす。

註2 東急不動産株式会社 佐々木隆彦 今光遺跡・地余遺跡 1980 同報文P-42 第47図－

82～86の土器を示す。

註3 福岡県教育委員会編 井上裕弘 山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第4集 下巻
同報文P-291、第141図132・133の土器を示す。

註4 註-3の報文及び付図をさす。

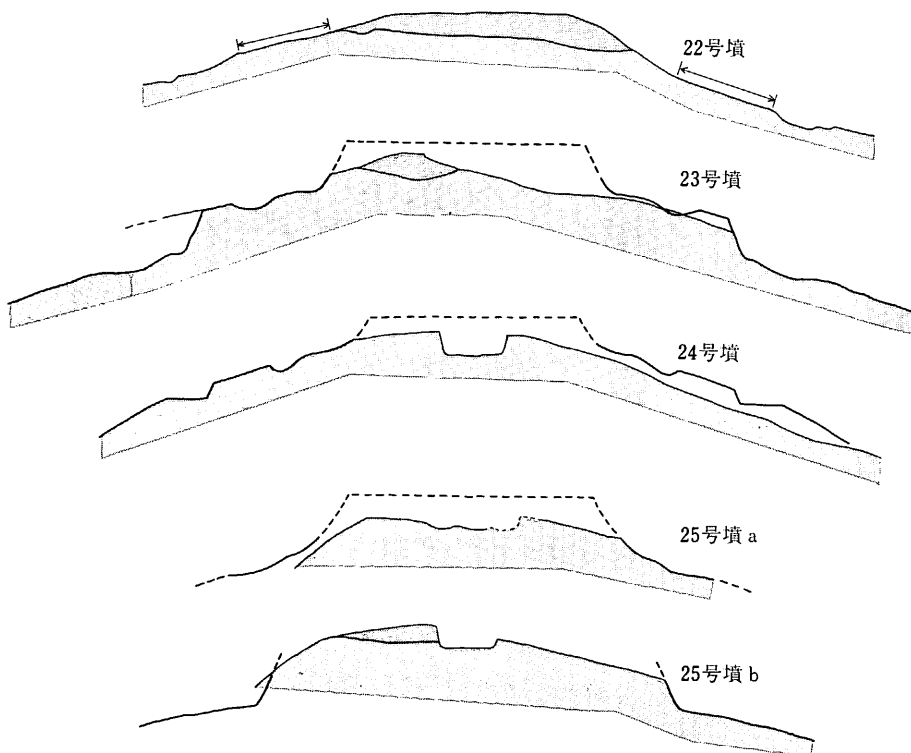
註5 財団法人 大阪文化財センター編 瓜生堂 昭和55年 同報文本文編第150図807の土器
をさす。

註6 註1 同報文P-84、Fig75-19の土器をさす。

註7 恵子遺跡調査会 東洋開発株式会社編 恵子若山遺跡 1975 同報文 本文P-21第11
図4の土器をさす。

2. 墳丘について

22～25号墳は地山を削り出し、その上に若干の盛土をする低墳丘墳である。墳丘は比高40
mのやせ尾根上にあるため、封土の流失などで残りが悪く、当時の墳丘は明確でない。しか



第32図 22～25号墳東西地山整形状態（縮尺 1/180）

し、今回の調査結果をもとに、墳丘の復原を試みてみたい。

第32図は墳丘の東西の地山と盛土の状態である。23～25号墳については、主体部が墳丘の中心にあると仮定して復原したものである。23号墳は、東側にある台状の削り出しやその外側の周溝と、西側の段落ちが24号墳東側にみられるように一連のものと考えられ、ほぼ尾根線上にある1号主体部の主軸を中心に合成した。24号墳についても同様に、東側にある整形は西側にもあると考え復原したが、段落ちの上や周溝の横などは、本来水平を保っていたとも考えられる。25号墳は前述のように、再度埋葬が行なわれる際につくりなおされているため、それぞれの墳丘の復原を試みた。

23～25号墳の北側には旧表土が残り、主体部設置予定部を基準に尾根を平坦にならしたもののと思われ、さらに側面を台状に削り出し、プランを整える。23号墳は北側の傾斜が著しく、平坦面を作るのに多くの土量が必要であったと思われる。23・24号墳は台状に削り出した裾から70～80cm外側に周溝をめぐらす、さらに外側に段落ちを作る。この全容は明らかにしえなかったが、やせ尾根という地形に盛土をする際、その流失を防ぐ目的で段状に削り、溝を土止めとして使用したとも推測しえるが、墳丘南側の溝に残る断面を観察する限りでは肯定し難い。また盛土を地山整形上面のみに行ない、段状の墳丘をもつものであるとすれば、溝が裾部ではなく中段にめぐる点に疑問が残る。22・25号墳については前章でふれたが、22号墳は23・24号墳と同様、截頭方錐形、または截頭方錐形の二段築造のいずれかに推測され、25号墳では実質的には2基の截頭方錐形墳の切り合い関係といえよう。

3. おわりに

22～25号墳は基本的に截頭方錐状を呈し、内部はいずれも割竹形木棺と推定される。23～25号墳については南北の周溝を切り合って隣接し内部主体の主軸もほぼ一致することから、これらは血縁の関係が推定される。22号墳はこれらの古墳とは別格といえる。裾部には石棺基2基、土壙墓1基があり、立地も尾根頂部先端にあたる。小田富士雄氏は福岡地方におけるこの種の墳墓・形態・内容において4期に分け、発展段階の図式化をおこなっており(註1)、Ⅰ期(特定家族とその近親者の墳墓からなり、近親者は墳墓の中心部に埋葬された段階)、Ⅱ期(特定個人墓が成立するが、その家族または近親者は墳墓の中心部をはなれた周縁外区域に埋葬される段階)、Ⅲ期(完全な特定個人墓の段階)、Ⅳ期(特定個人墓がより強力な首長墓的性格を備えた段階)とされている。22号墳はⅡ期に当たると考えられるが、同段階と考えられている油田2号墳(註2)、宮の本1号墳(註3)はいずれも箱式石棺である点、周溝の内側で南北13.5mを測る墳丘などは、新しい要素といえよう。23号墳は内部主体を2基もつものであり、古い要素といえるが、1号主体部が割竹形木棺と推定され、墳丘も整っていることから2号墳より時期が上とは考え難い。22号墳との切り合いは不明であるが、25号墳よりは下らないものである。したがって4世紀後半～5世紀初頭という年代を与えること

ができるが、立地や地山整形は25号墳に類似する。24号墳は鏡片の副葬がみられ、地域小首的性格を強く帯びてくるものでⅢ期に当る。内部主体も22号墳に比べると裏込め粘土をふんだんに用いている。25号墳は2つの内部主体が、それぞれ墳丘をもっている。特定個人墓の段落に到達しながら、墓域とする尾根上にもはや墳丘を構築する面積を確保できなかったものと思われる。

以上のことから、阿志岐古墳B群22～25号墳は5代にわたり（22号墳東隣に同種のものと思われる26号墳があり、これを仮に加えるならば6代）、現御笠地域における共同体の特定集団の累代墓として発展的に形成されたといえる。そして、これらは谷を狭み対面する竪穴系横口式石室をもつA群3号墳（註4）に受け継がれていくものと思われる。

筑紫野市、太宰府町に渡るいわゆる二日市狭域部（註5）を中心とした地域には、本古墳群をはじめ宮ノ本・古剣塚（註6）・唐人塚（註7）・峠山（註8）・菖蒲浦（註9）といった小地域を単位とする特定集団の良好な遺跡が多く、これらと原口古墳（註10）の影響、さらには甘木・朝倉地域や那珂川中流域に集中するこの種のものとの関係を明らかにすることは、古墳発生期の諸問題を解く糸口になるものと思われる。

また、21号墳についてみると、単室両裾形の横穴式石室を内部主体とするものである。前掲した須恵器（第11～13図）のうち坏についてみると、1がⅢa、2・4・5がⅢb、3・6がⅢb～Ⅳa、7がⅣaの各様式に比定されよう。また墓道の調査においては最底2回の追葬が行なわれていることが認められた。以上のことから本墳の造営時期は1の須恵器を考えるならば6世紀中葉であろうが、1は小片1点のみであり、次の6世紀後葉とした方が妥当と考える。また墓道から出土した8・9はⅢb～Ⅳaに比定され、最初の追葬期のものであり、さらに7世紀初頭に2度目の追葬があったものと推定される。以上のような点は、本墳の北700mにある杉ノ谷古墳群2号墳（註11）に類似し、宮地岳西麓に広がる古墳群間の関係が目される。

- 註1 小田富士雄「西日本における発生期古墳の地域相」古文化談叢第4集 1978 九州古文化研究会
- 註2 油田古墳群 那珂川町文化財調査報告書第1集 1969 那珂川町教育委員会
- 註3 宮ノ本遺跡 太宰府町の文化財第3集 1980 太宰府町教育委員会
- 註4 阿志岐シメノグチ遺跡 筑紫野市文化財調査報告書第1集 1972 筑紫野市教育委員会
- 註5 奴国その後 井上裕弘 歴史公論7巻2号 1981 雄山閣
- 註6 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ⅩⅣ上巻 1978 福岡県教育委員会
- 註7 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ⅩⅧ 1977 福岡県教育委員会
- 註8 小田富士雄「西日本における発生期古墳の地域相」古文化談叢第4集 1978 九州古文化研究会に摘要が掲載されるが、いまだ正式報告書の刊行をみない。
- 註9 菖蒲浦古墳群の調査 太宰府町の文化財第1集 1976 太宰府町教育委員会
- 註10 小田富士雄 古墳文化の地域的特色 九州 日本の考古学Ⅳ 1967 河出書房
- 註11 杉の谷古墳群・カケ塚古墳埋蔵文化財調査報告書 筑紫野市文化財調査報告書第2・3集 筑紫野市教育委員会

図 版



(1) 遺跡の遠景（西から）



(2) 遺跡の遠景（北から）

(1) 遺跡の全景（東から）(2) 表土除去後の遺跡の全景（南から）

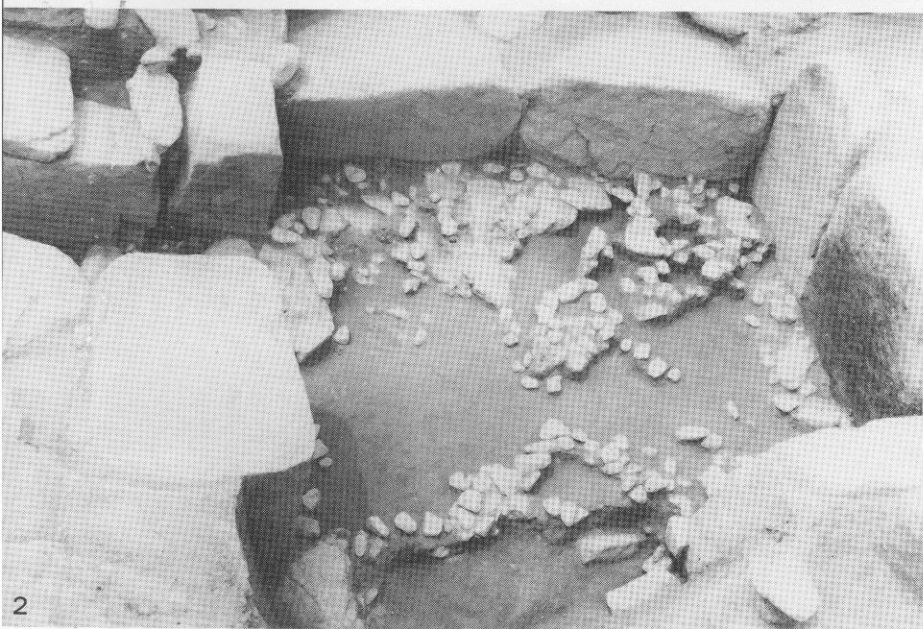


- (1) (2) 21号墳と22号墳（西から）
 21号墳全景（東から）
 (3) (4) 21号墳閉塞状態
 21号墳墓道





(1)
21号墳羨道部



(2)
21号墳玄室



(3)
21号墳玄室内遺物出土状況

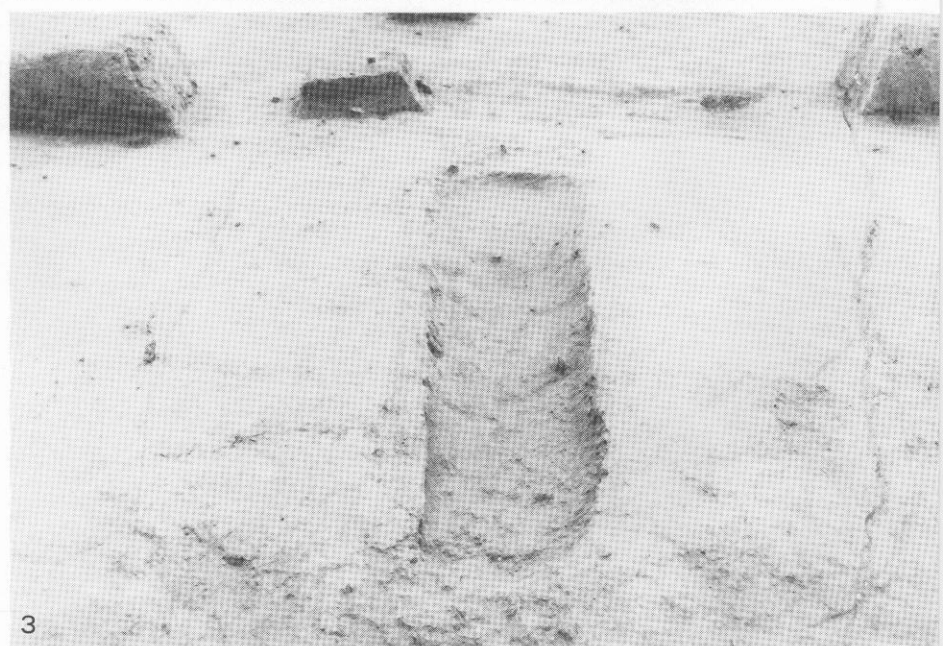
(1) 22号墳全景(東から)



(2) 22号墳と周溝(北から)

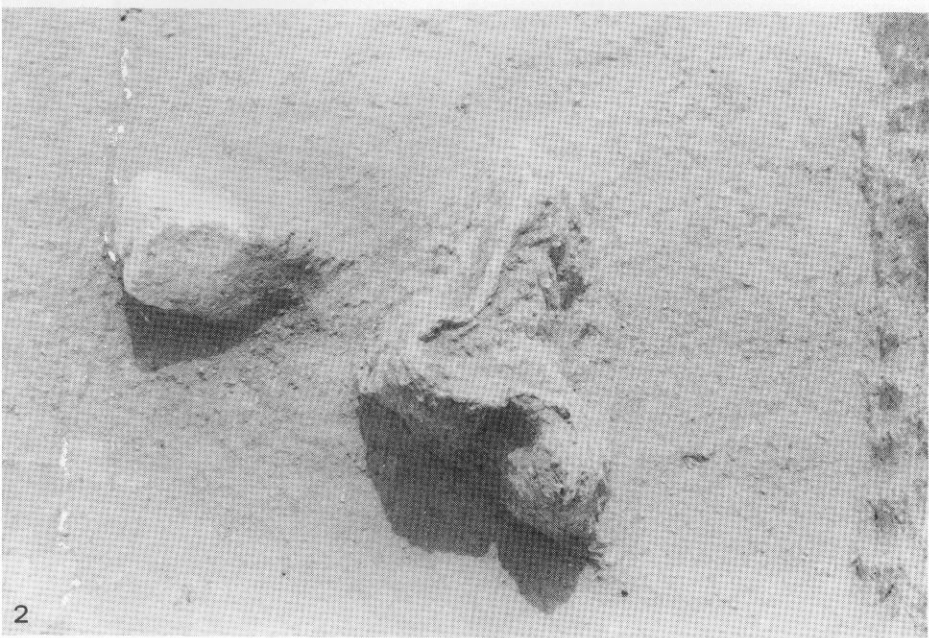


(3) 22号墳主体部検出状況(南から)

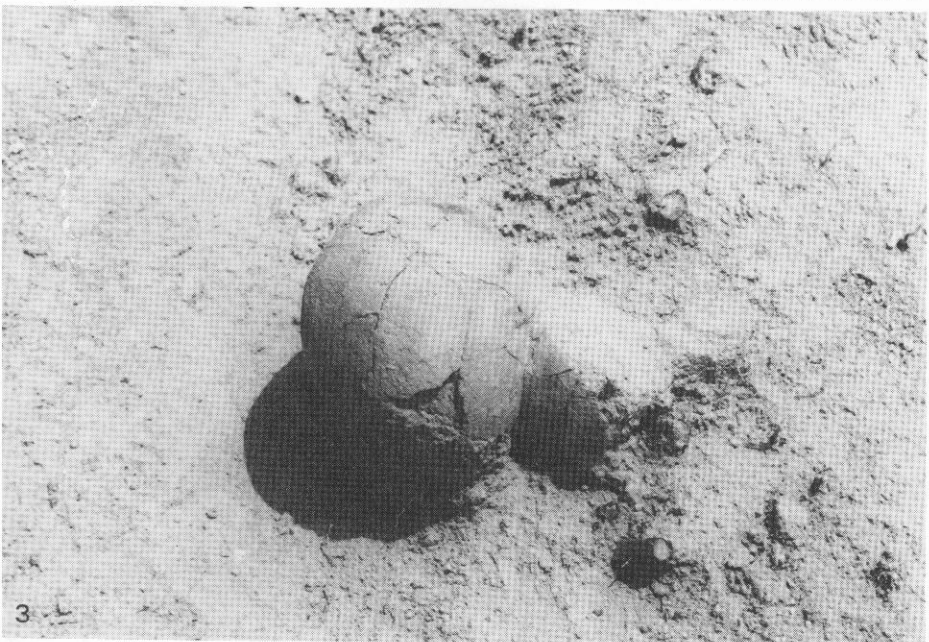




(1)
22号墳主体部



(2)
22号墳鉄器出土状況



(3)
周溝内土器出土状況

(1) (2)
23号墳全景(南から)
23号墳1号主体部



1



3



2

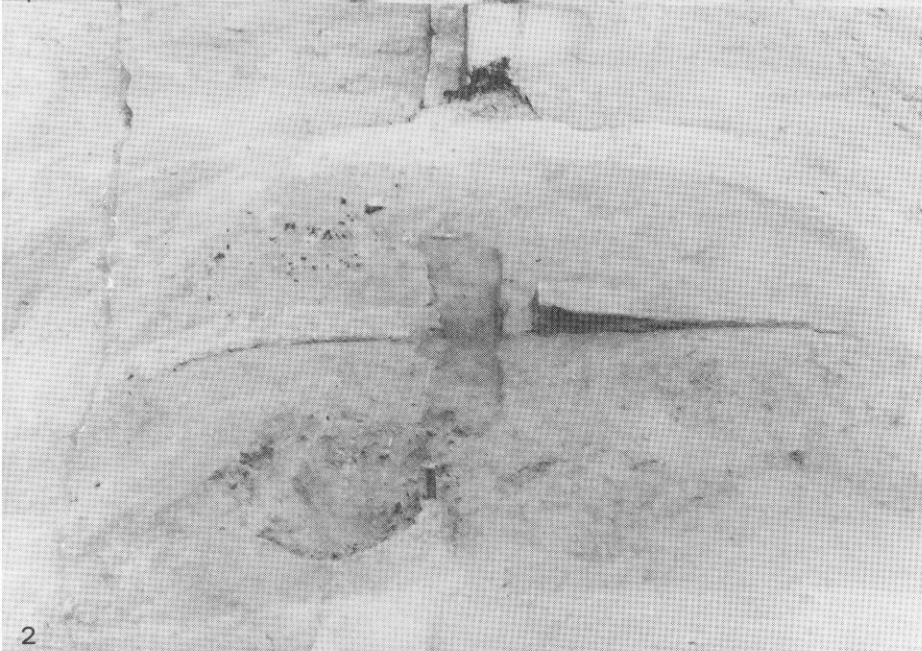
(3) (4)
2号主体部検出状況
1号主体部鉄器出土状態



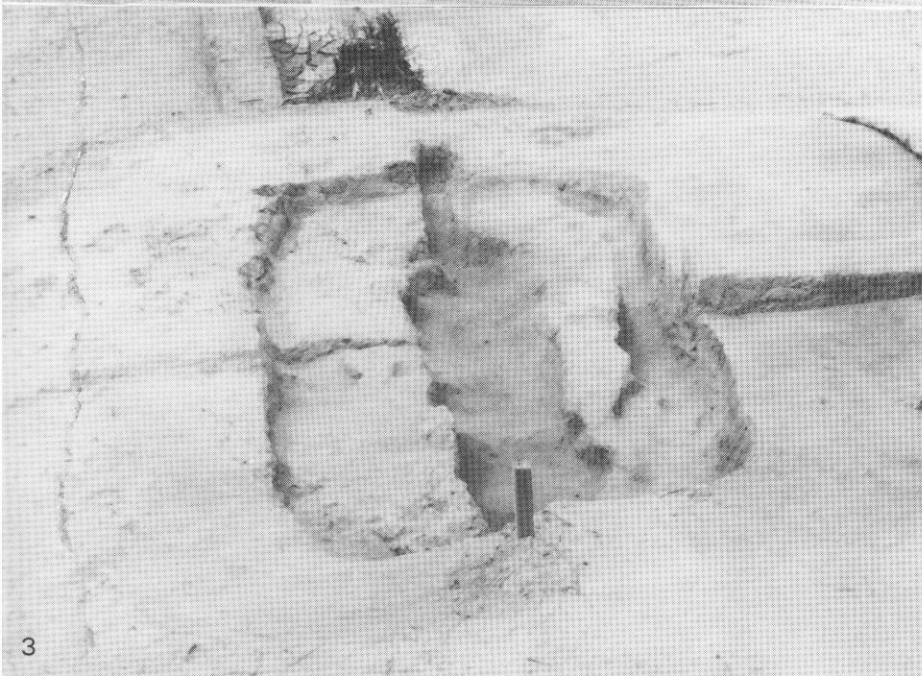
4



(1) 24号墳全景(南から)



(2) 主体部検出状況

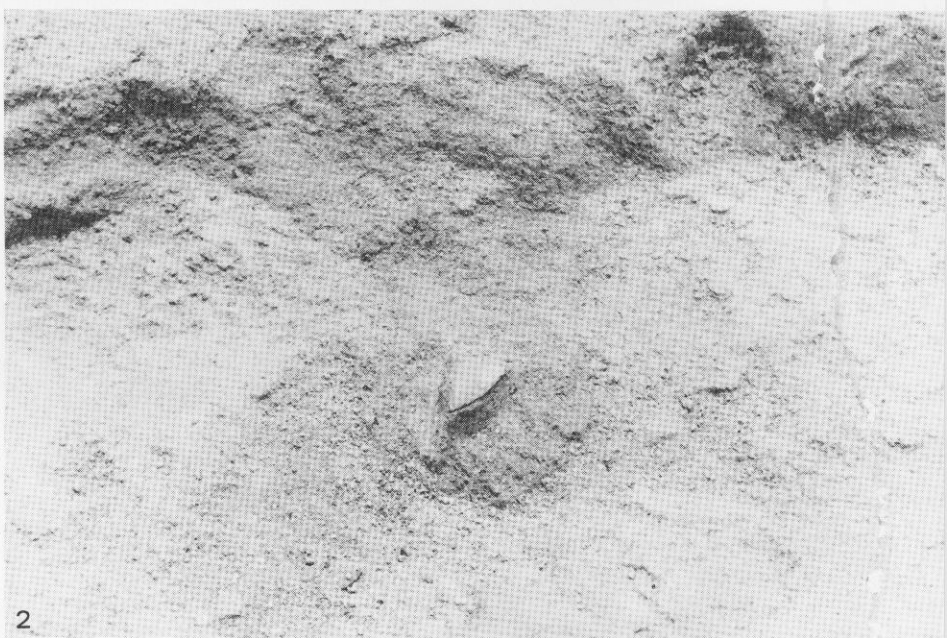


(3) 主体部

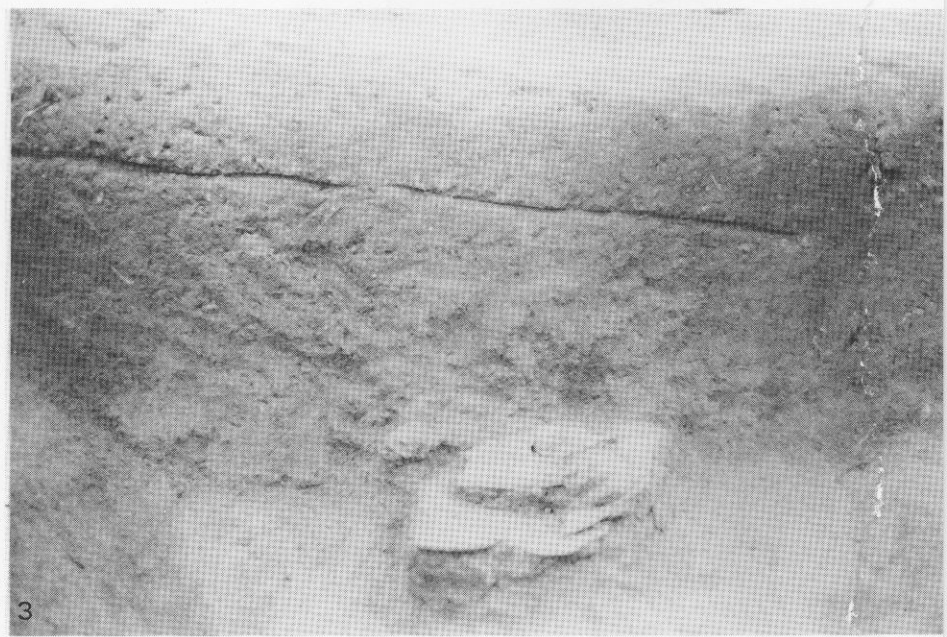
(1) 24号墳主体部完掘状況



(2) 主体部内銅鏡出土状態

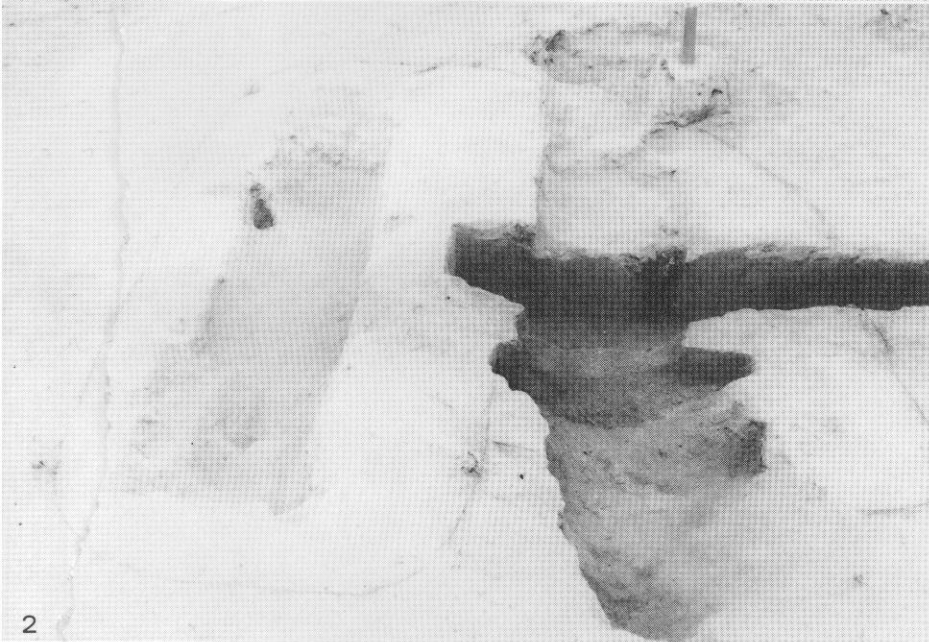


(3) 25号墳周溝内土器出土状態

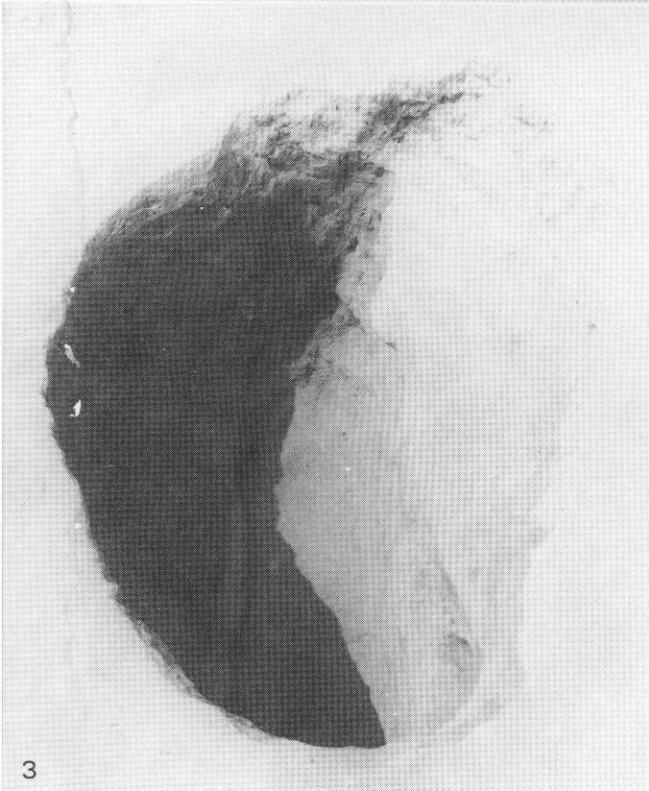




(1) 25号墳全景（南から）



(2) 1号主体部(右)と2号主体部(左)

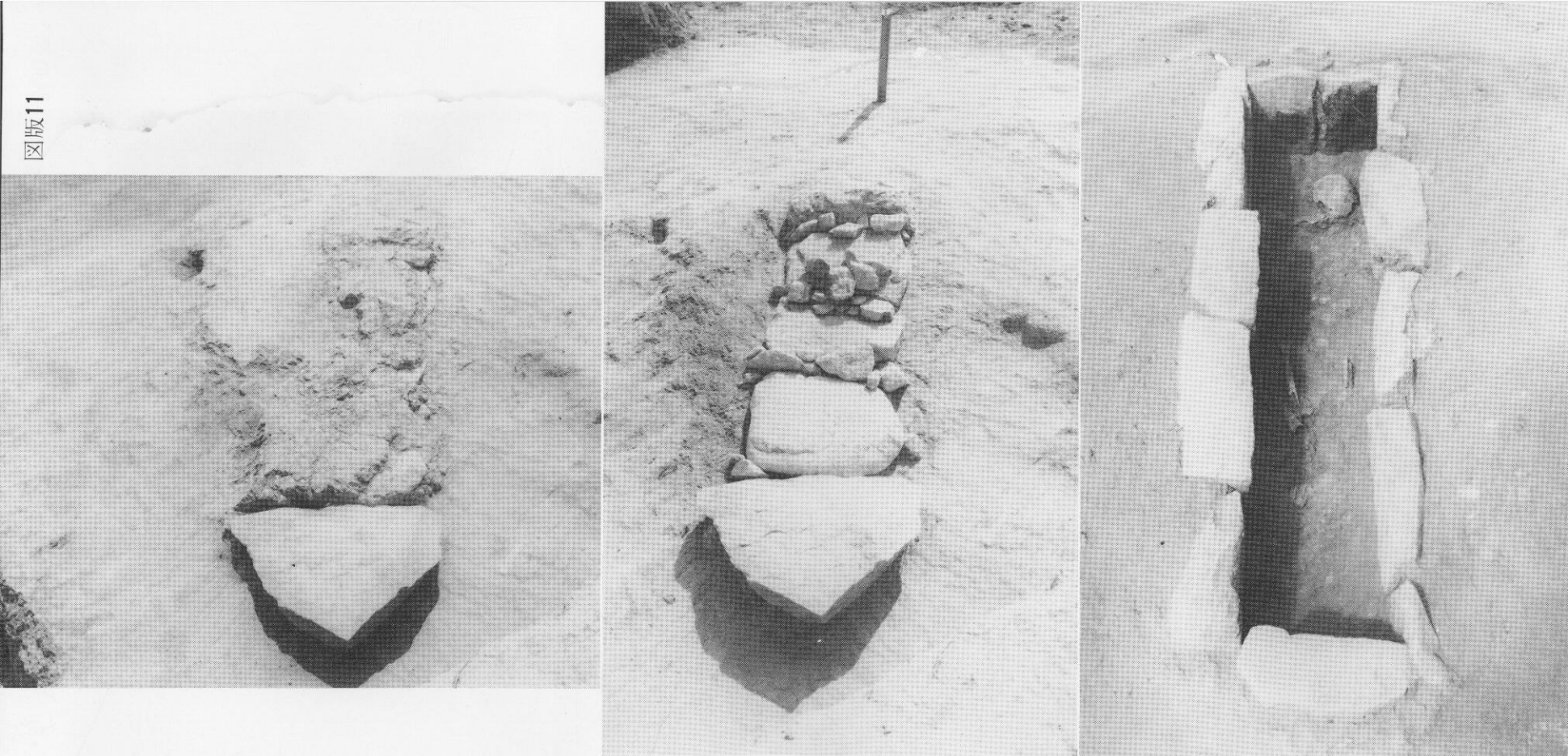


(3) 木棺墓全景（南から）

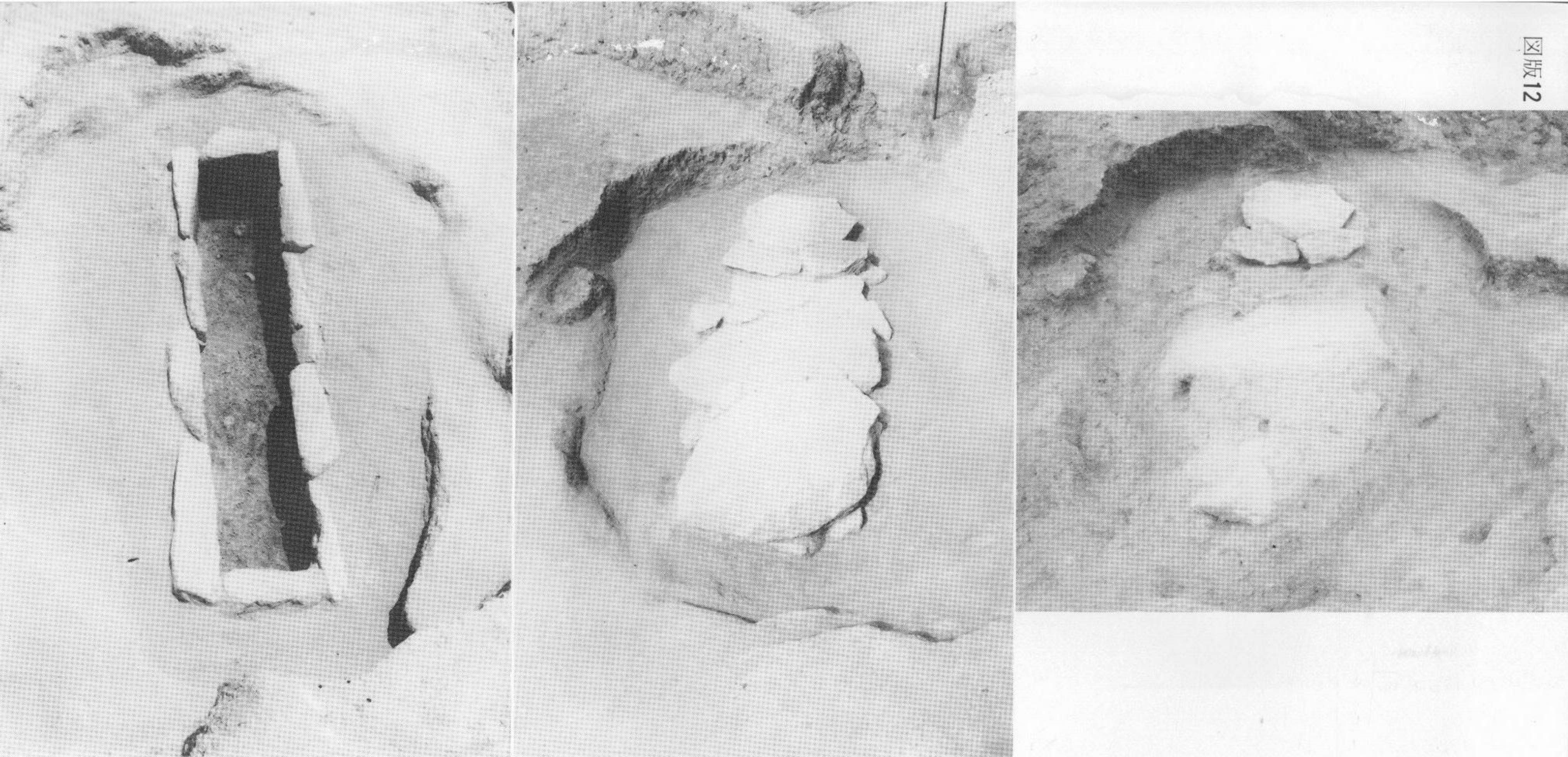
1

2

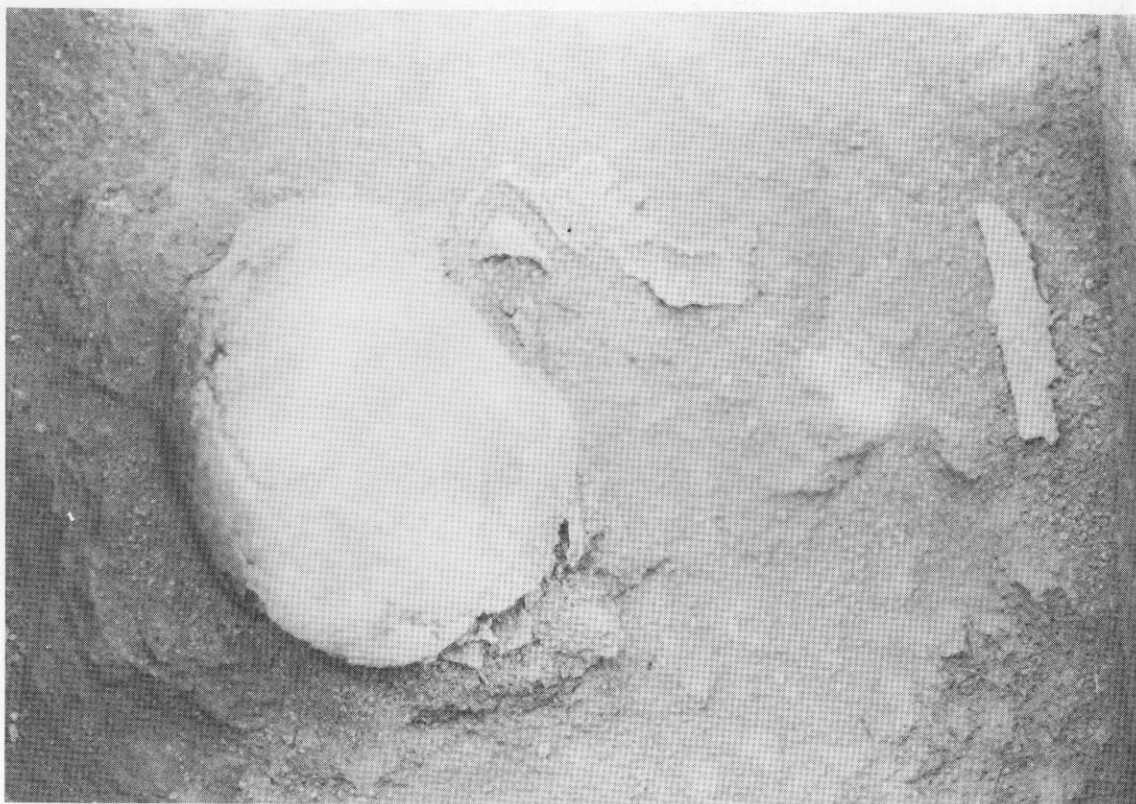
3



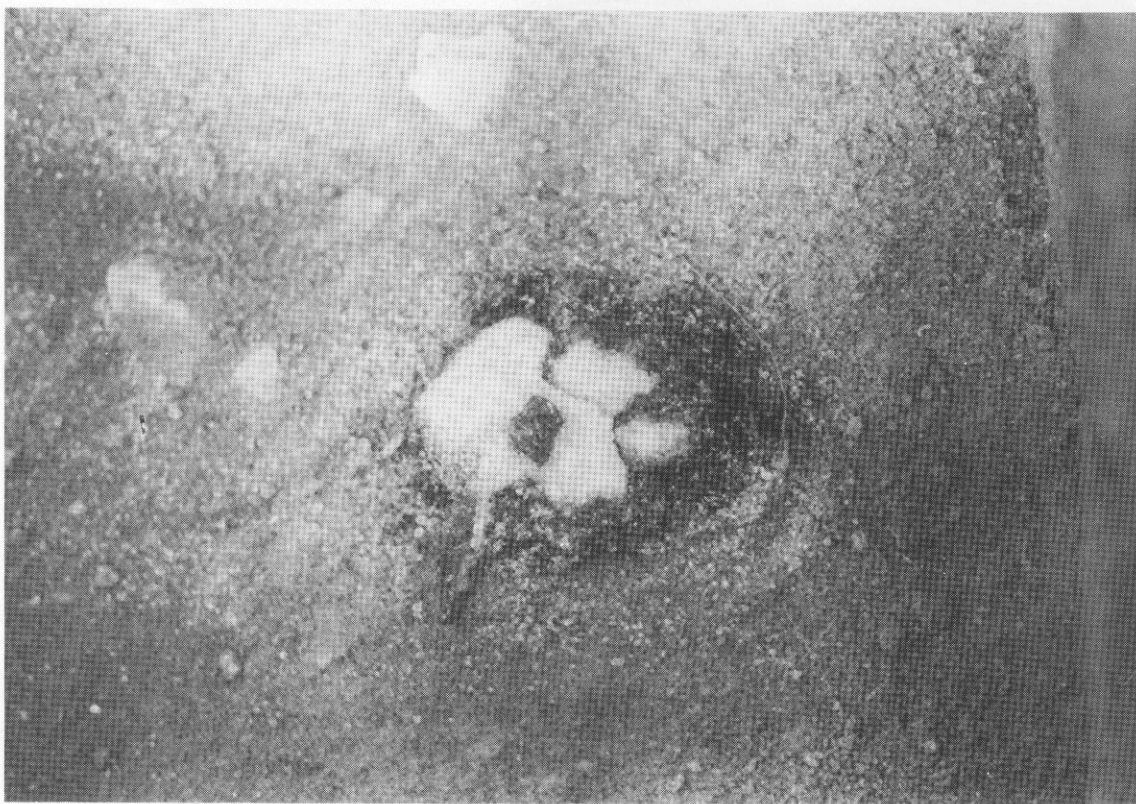
1号石棺墓（東から）



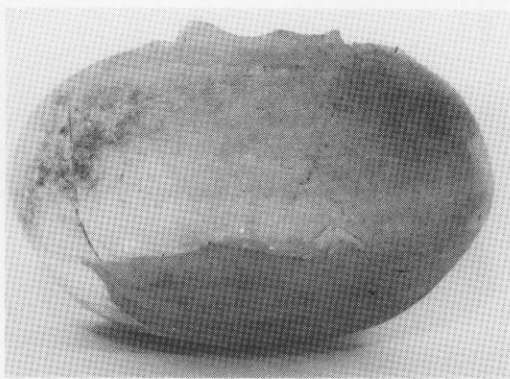
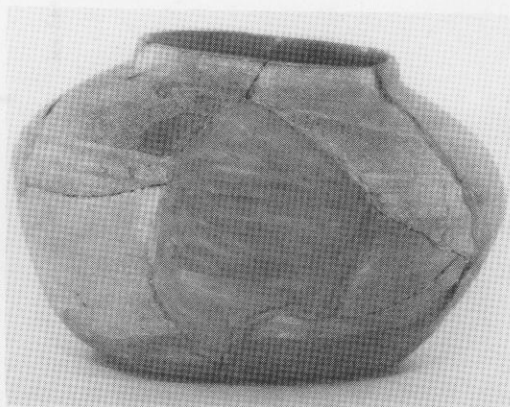
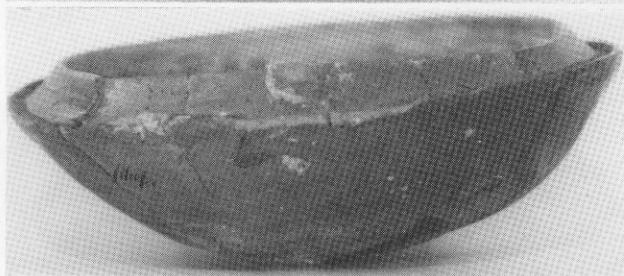
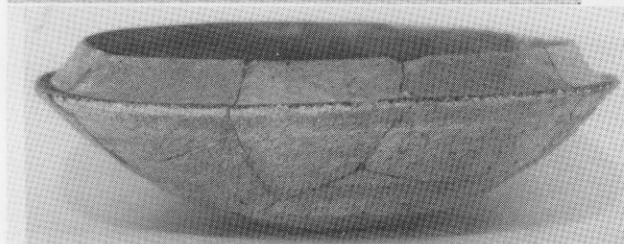
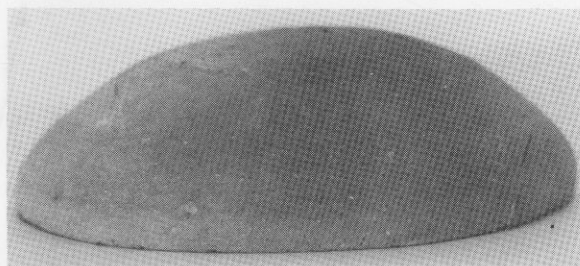
2号石棺墓（東から）

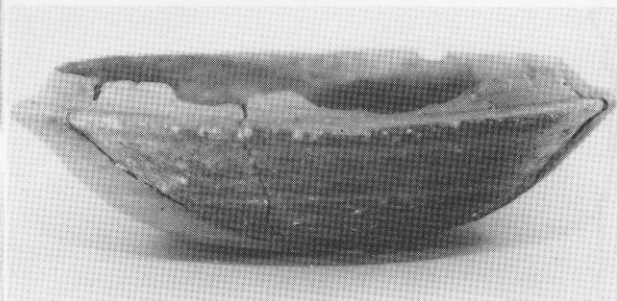
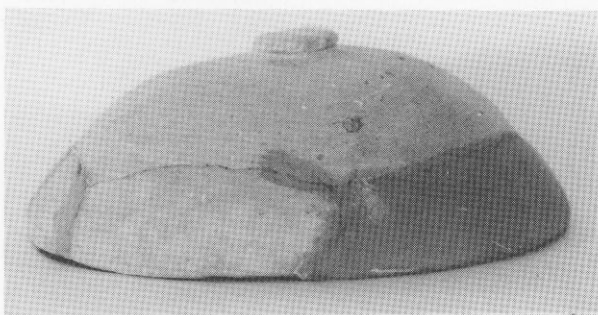


(1) 1号石棺墓人骨と鉄器



(2) 2号石棺墓人骨

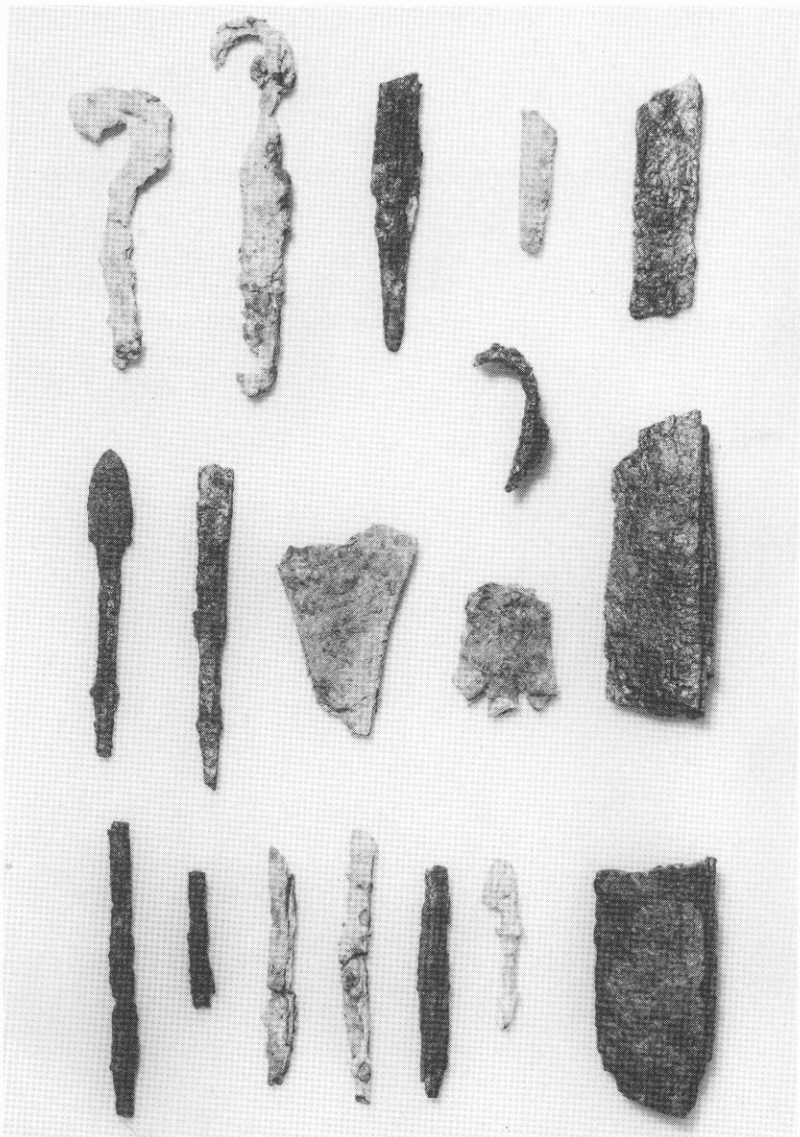




21号墳出土土器（その2）

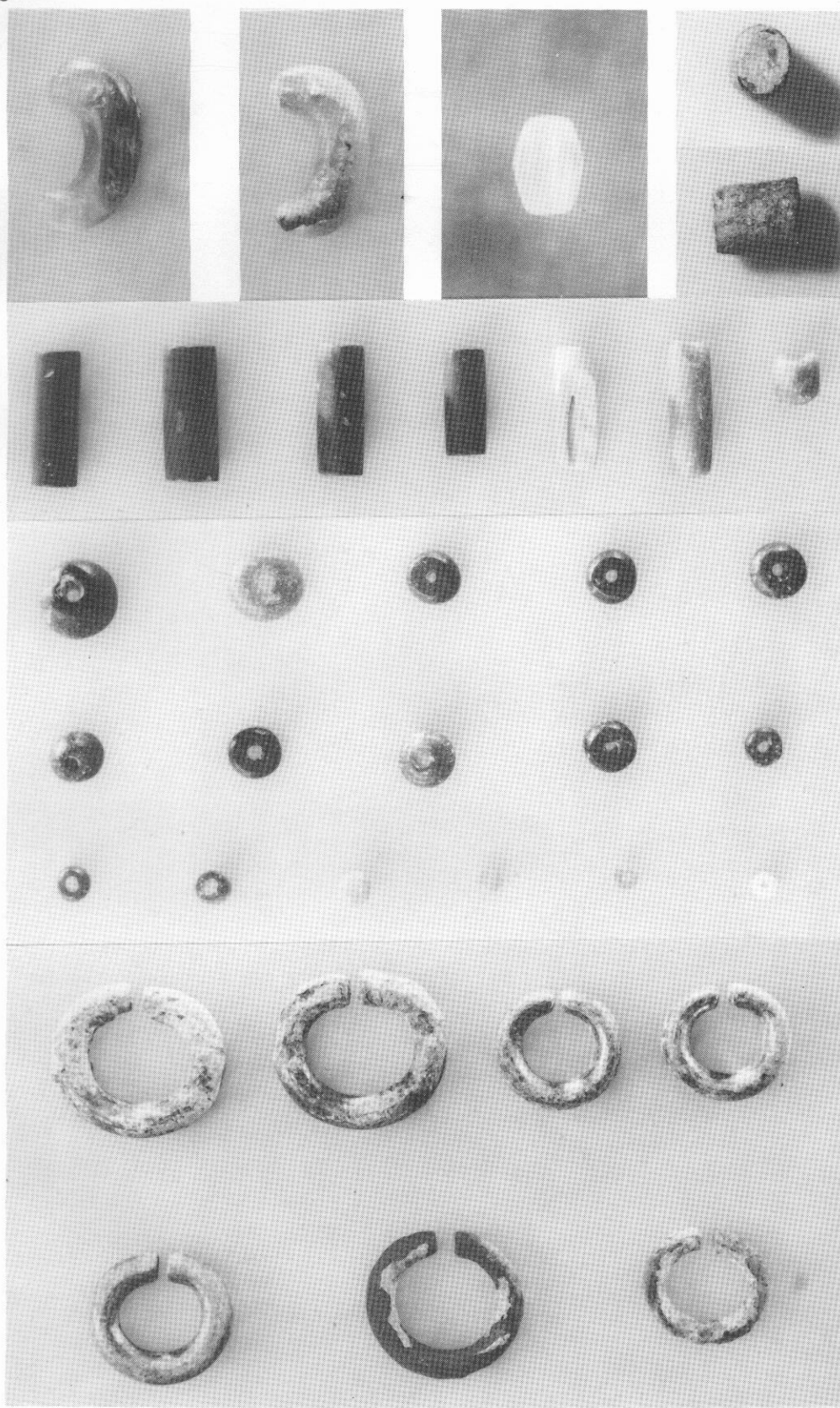


(2) 21号墳出土鉄器

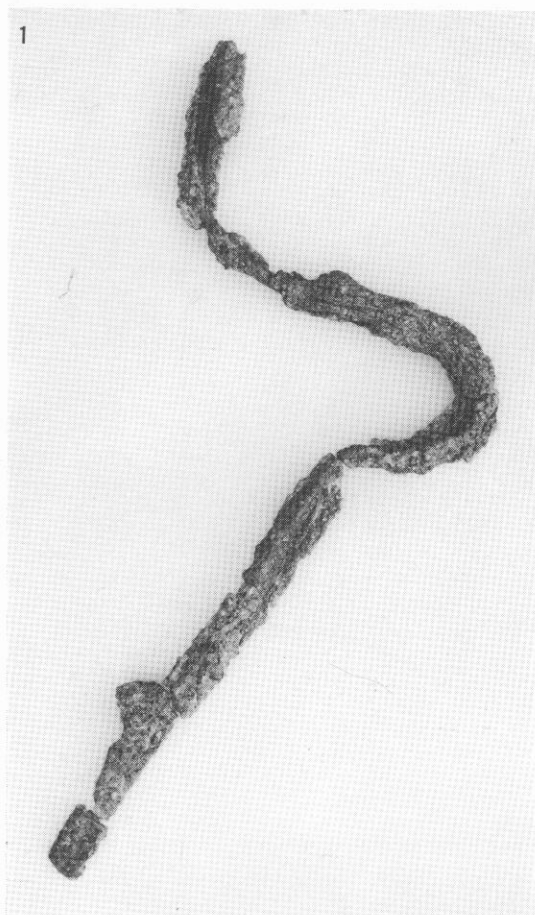


(1) 21号墳出土土器(その4)

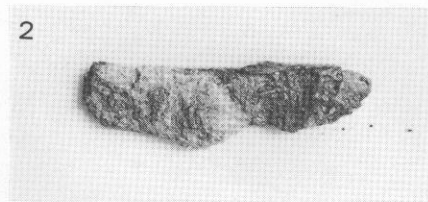




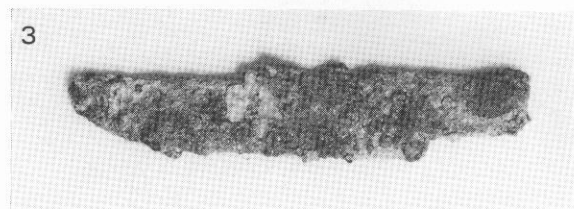
21号墳出土装身具・装飾具



(1) 22号墳出土鉄器



(2) 23号墳出土鉄器



(3) 1号石棺墓出土鉄器



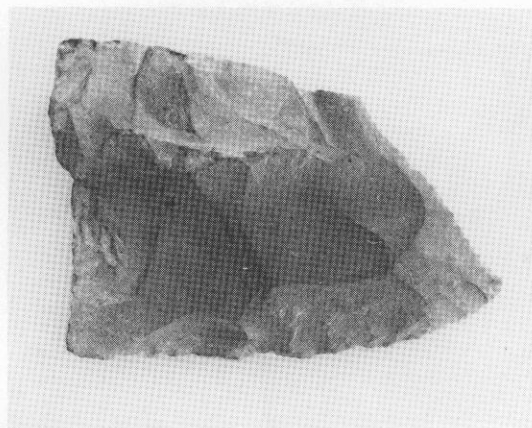
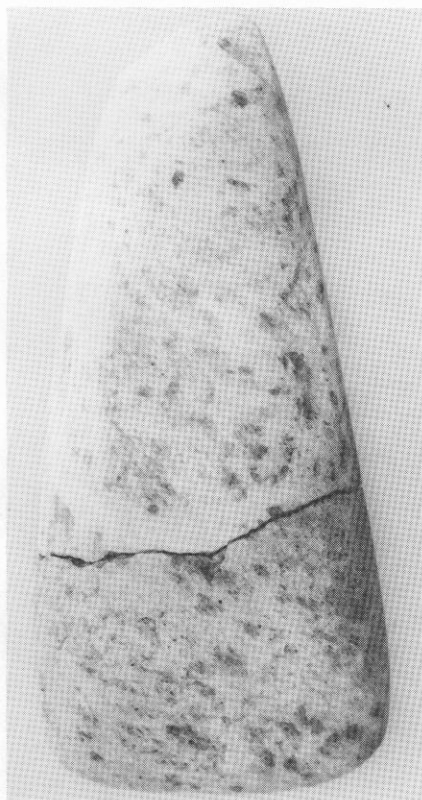
(4) 22号墳周溝出土土器



(5) 25号墳出土土器



(1) 24号墳出土銅鏡



(2) 遺跡出土の石器

筑紫野市文化財調査報告書

第 7 集

昭和 57 年 3 月 31 日

発 行 筑 紫 野 市 教 育 委 員 会

筑紫野市大字二日市753の1

印 刷 福 岡 印 刷 株 式 会 社

福岡市博多区東那珂1丁目10-15